
こちらコラボレーション私立クロスオーバー学園

サキガケ カイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

こちらコラボレーション私立クロスオーバー学園

【Nコード】

N5038X

【作者名】

サキガケ カイ

【あらすじ】

この作品は、架空の学園を舞台に、アニメ、マンガ、ゲーム、ラノベなどの様々なキャラクターが出演する学園コメディです。感想、ご意見、お待ちしております！【登場作品】仮面ライダーフォーゼ、銀魂、とあるシリーズ、ハヤテのごとく！、けいおん！、AngelBeats!、戦国BASARA、真・三國無双、真・恋姫無双、魔法少女リリカルなのは、IS インフィニット・ストラトス、マクロスF、フルメタル・パニック！、ガンダムシリーズ、テイルズオブシリーズ、コードギアス 反逆のルルーシュ、灼眼の

シャナ、俺の妹がこんなに可愛いわけがない、
F a t e O N E P I E C E、

青・春・上・等（前書き）

銀時：あー、はじめにしておくことがあります。

この物語はフィクションであり、実際の人は関係ありません。

後キャラ崩壊、設定改変があると思いますので、ご注意くださいお読みください…

つかファンフィクションなんだから気にする必要ねーだろ！

青・春・上・等

古等簿市ことうぼしにある私立黒楼州学園くろろうしゅうがくえん。

「自由」を校風とするこの学園は、個性的な人がたくさんいること以外いたってただの学園である。

その通学路つうがくじの途中にある橋の上、一人の女子生徒が、この学園に通う歌星賢吾うたほしけんごに何かを渡していた。

「賢吾先輩！これ読んでください！」

その封筒には「歌星賢吾様」と書いてある。ラブレターのようだが…

「時間の無駄だ」

と、賢吾は言い放ち、ラブレターをポイッと放り投げ、それは川に落ちて流されてしまった。賢吾の行動に女子生徒はしょんぼりした。

その時…

「おい！！」

一連の流れを黙って見過ごすことが出来なかったのか、どこからか青年が乱入して来た！青年はリーゼント、短ラン、ボンタン、T

シャツと言ついかにも昭和の不良のようないで立ちをしている。リーゼントは賢吾に掴みかかり、眉間にしわを寄せて怒鳴った！

「捨てる奴があるか！もらった手紙は最後まで読めよ！あいつの思いはきちんと受け止める！断るなら読んでから断れ！それが礼儀ってモンだろうが！」

「……………」

賢吾のほうはリーゼントと目線を合わせずに黙っている。するとリーゼントは賢吾を放し、女子生徒に「持ってる！」と「友情」の2文字の入ったカバンを渡すと、なんと橋の上から飛び降りた！！

「おっしやあああー！！！！」

雄たけびを上げながら川へ飛び降りるリーゼント。しかし着地した途端、地面から激痛が伝わり「いつてー！」と叫んだ。しかしそれでもリーゼントは痛みをこらえ、川辺を探り始める。この状況を見守っていた賢吾が皮肉る。

「…馬鹿の極みだな」

まったくです。

そして彼は「こんな馬鹿と関わりたくない」と思ったのか、さっさと去ってしまった。

2年B組。朝のホームルームが始まる前の教室はガヤガヤしている。そして銀髪で天パの死んだ魚のような目をした教師が教室に入ってきた。

「おいテメーら席につけー」

天パ教師に言われると生徒は自分の席に着く。

「夏休み楽しかったかー？宿題やったかー？西瓜食ったかー？海行ったかー？コミケ行ったかー？蚊何匹殺したかー？」

「楽しかったー」

「何言ってるんだよ銀八先生ー」

「土方を20匹殺した夢なら見ましたー」

銀八…もとい坂田銀時さかたぎんときが冗談を飛ばすと生徒らに突っ込まれる。

「前置きはさておき…朗報だ。今日からこの2年B組に、新しいクラスメイトが増えるぞ」

銀時の言葉に「おおー！」と言う言葉が出る。

「可愛い女の子ですかー？」

「イケメンだといいなあー」

「マヨネーズ大好物ですかー？」

「ハイやかましいぞテメーら。ちった落ち着いてらんねえのか？まあよし」

銀時が制すると、扉の向こうの転校生に声を掛ける。

「つつわけで、入って来い転校生！」

扉からやってきたのは、なぜかズブ濡れになっているが…リーゼント、短ラン、ボントン、Ｔシャツと言いかにも昭和の不良のようないで立ちをしている青年であった。リーゼントはチヨークを手に取ると、扉にでっかく自分の名前を書いた。そして彼は、

「如月弦太郎だ。オレの夢は、この学校の連中全員と友達になることだ！」

と同時に、満面の笑顔と一緒に指差しポーズを決め、「よろしくな！」と声を大にして名乗った。

弦太郎と名乗ったリーゼントは「よっ！」「よろしく！」「みんなよろしく！」と生徒の掌や肩をタッチしながら教室を歩き回ると、ある女子生徒に目が止まった。

「あれ…ユウキ？」

「弦ちゃん！」

弦太朗の目に留まったのは城島ユウキであった。再会を喜んだ弦太朗とユウキはお互いに握手し、握り拳でお互いの拳を打ちあった。二人の友情の証らしい。

「久しぶりだなあ！小学校以来か？」

「そうだね！3年生くらい！」

「相変わらず夢は宇宙飛行士かあ！」

「そう言う弦ちゃんは友達何人できたの？」

「今じゃ1000人だぜ」

「すごい！！」

「：おい、転入早々何イチャイチャしてんですかー？海外ドラマのバカップルかテーマーらは：感動のところ悪いが、席着け如月」

銀時に席に着くように言われた弦太朗だが、「あ、ちょっとまって」と言うと、ある人物の机に一枚の封筒を叩きつけた。封筒もなぜか水に濡れている。

「歌星賢吾さん。お前宛だ」

「わざわざ拾ってきたのか：お節介だな」

「ああ、お節介だ。友達だからな」

悪びれもしない弦太朗の態度に、賢吾は眉をひそめる。

「…君のような人間の友達になつた覚えはないが？」

「女の子からもらつた手紙も捨てるようなお前は気に食わねえ…だからダチになる」

「非論理的な発言だ」

賢吾の不遜な態度に（どつちが不遜なんだよ…）弦太朗は彼の机をドンと叩き、豪語した！

「いや、スジなら通つてる。お前みたいな気に食わねえ奴と友達にならなきゃ、とてもこの学校の連中全員と友達になんかなれないからな！」

だが賢吾はそれでも考えを改めようとしなない。

「俺と君が友達になる確率は…ゼロだ」

と言つて教室を後にしようとする。弦太朗が呼び止めるが、

「あー、やめとけ。歌星のヤツいつもこうなんだよ…」

銀時に止められ、賢吾に逃げられた。その後席に着いた弦太朗は
とらふと…

「だったらなつてやろつじゃんか…意地でもな」

賢吾と友達になる夢を諦めてはいなかった。

青・春・上・等（後書き）

キャストの皆さま

『仮面ライダーフォーゼ』より

如月弦太郎、歌星賢吾、城島ユウキ

『銀魂』より

坂田銀時、土方十四郎？、沖田総悟？

これからもよろしくお願いいたします。
感想、ご意見、お待ちしております。

転・校・初・日（前書き）

弦太郎：なあ、フォーゼはいつ出すんだ！？

ユウキ：それは未定だつて。

弦太郎：くっそー！早く「宇宙ギター！」つて言いてえー！

「タアアアア!!」

めが：いや新八がやはりどこかに向かって叫ぶ。銀時とチャイナっぽい服を着た少女にダメ出しされる。

「まったく、だからいつまでも地味なんだよ」

「そうアルね！一から修行しなおすね、ダメガネ」

「おいダメガネってなんだよ！あんたらジャンプ連載当時からずっと僕のことそんなふうに思ってたのかよ！」

なんか地：いやかわいそうな奴だなと弦太郎は思った。

「次は私の出番アル！私、神楽アルよ！よろしくな、泥水かぐらしたたるズブ濡れ男！」

「おい神楽ちゃああん！初対面の人にいきなり失礼だろおお！」

新八のツツコミが飛んだが弦太郎のほうはそんなことも気にせず「おう、これからよろしく！」と挨拶した。

「オメーも少しくらい何か言えええええ！」

新八のツツコミが教室に響く。

次に、水色の髪をした爽やかな少年が金髪ツインテールの少女に「お嬢様、一緒に自己紹介しましょう」と声を掛けた。不思議に思った弦太郎は少年に話しかける。

「お嬢様？お前って…」

「あ、どうも。始めまして如月さん。僕は三千院家さんぜんいんの執事をしていきます、綾崎ハヤテです。こちらは三千院ナギお嬢様です」

「わ…私からもよろしく頼むぞ、如月」

にこやかに挨拶するハヤテ少年と、恥ずかしがるナギ少女。

「なるほどねえ…ま、よろしくな！（執事って、じいさんがするものかと思ってたぜ…）」

弦太朗の目線から、ハヤテの服装が執事が着ているようなスーツ姿であることを感じていた。

「次、ツラ」

「「ツラじゃありません桂かづです！」」

銀時に指名された途端、二人の男女が立ち上がり、見事にハモった。一人はピンク色の髪をした少女であり、そしてもう一人は黒髪長髪の男で、いかにもツラを被っ…

「ツラじゃない桂だ！」

「いいから自己紹介してください小太郎こたろうさん…」

ピンク髪の桂にダメだしされ黒髪の桂が乗り気ではないながらも立ち上がり、弦太朗に自己紹介した。

「コホン…俺は桂小太郎だ。間違っても『ヅラ』ではないように！」
ピンク髪の桂が続いて自己紹介する。

「桂ヒナギクです。このクラス委員長もしているの。よろしくね」

「おう、よろしくヒナギク！」

「ヅラじゃない桂だ！」

「……………」

ヒナギクに向けて言ったつもりの言葉に、やはりヅラが反応する。どうもヅラ…桂小太郎という男は苗字を気にしているフシがある…ヒナギクもちよっと困惑した。

「なあ、こいつらはいいのか？」

弦太朗が後ろを指差すと、そこには教室の後ろで瞳孔の開いた黒髪の男となんか腹黒そうな茶髪の青年がドラゴンボールの1シーンのごとく殴りあっていた。呆れた銀時が「おい！」と言葉を投げかける。

二人はバトルをやめ、弦太朗に自己紹介した。

「俺は土方十四郎^{ひじかたしゅうろう}。夢はマヨネーズ王国を作ることだ」

「沖田総悟^{おきたそうご}でさあ。とりあえず土方の死ぬ前のヅラを拝むのが夢だ
ぜ」

「二人ともいい夢持ってんな！応援してるぜ！」

(いやそれは否定するべきだろ…)

それがクラス全員による弦太朗の天然発言への感想だった。そして土方と沖田はバトルを再開した…

次は黒髪ロングでスタイル抜群の少女が立った。ぱっと見てしっかりしていきそうな彼女であったが、しかし弦太朗と視線が合った途端、突然怯えはじめた。おそらく弦太朗のそのルックスとしゃべり方の印象でそうなったのだろう。

「おいどうした。そうビビる事はねえよ…ほら」

弦太朗が手を差し伸べてきた。握手をするためだ。

しかし彼女にはこう見える。

『ヒツヒツヒ…貴様を冥土に連れて行ってくれよう…』

(い、いやだ！冥土に行きたくない！助けて…！)

これが彼女の視線である…。もう一度言っが弦太朗は握手を求めているのであって何も冥土につれて行こうなんて考えていない。彼女が呆然としていたその時…

「ほーら^{みお}澪、弦太郎君が握手求めてるぞ〜」

隣の席のデコ出しでカチューシャをつけた少女が二人で澪と呼ばれた黒髪の少女をけしかける。

「い、いや…なんか怖そうで…」

「大丈夫だよ！今まで放課後ティータイムでたくさん頑張ってきたから、澪ちゃんも出来る子だよ！」

「そうよ澪ちゃん。ユウキちゃんの友達ですもの、絶対仲良くなれるわ」

右の前髪にヘアピンをつけた少女とブロンドのおっとりした少女が震える澪を勇気付ける。

「ほら、元気出して澪ちゃん。弦ちゃんは心の広い人よ」

ユウキに言葉をかけられ、澪は安心した。そして差し伸べてきた弦太郎の手を掴む。

「あ、秋山^{あきやま}…澪だ…よろしく、弦太郎君」

「こっちこそ！一緒にやっていこうぜ！」

弦太郎の満面の笑みに心がほっとした澪であった。

澪が笑顔になったところで、カチューシャ、ヘアピン、ブロンドが自分の名前を名乗る。

「あたしは田井中律！りつちゃんて呼んでもいいぜ！」

「平沢唯だよー。今日からよろしくね、弦ちゃん！」

「私、琴吹紬です。ムギって呼んでね」

と、紬が一息入れると、

「私たちは4人は軽音部をしているのよ…りつちゃんが部長でドラマー、私はキーボード、唯ちゃんはギターに漣ちゃんはベースなんだけど、唯ちゃんと漣ちゃんはボーカルもやるの。あと一人、後輩もギターをするの」

紬が説明すると弦太朗が大いに喜んだ。

「バンドか！楽しそうだな！お前らの演奏、いつか楽しみにしてるぜ！」

「後で後輩も紹介してあげるよ！」

唯も続けて弦太朗に呼びかけた。

「後輩か…ぞくぞくしてきたぜ！」

次の自己紹介は、銀髪で褐色の目をした、まさしく天使と呼ぶに相応しい神秘的な少女であった。

「立華奏です…よろしく、如月君」

「おう！よろしくな奏…って何食ってんだ？」

奏が食べていたのは麻婆豆腐であった。

「麻婆豆腐…食べる？」

「いや、いいぜ」

弦太朗は奏の頼みを断った。つうかホームルームで飯食うなよ…

次は紫色のボブカットで、リボンの付いたカチューシャを頭につけた少女が名乗りを上げた。

「仲村なかむらゆりよ。弦太朗君、よろしくね！」

「おう、よろし…おわ!？」

突然、窓から一本の槍がガラスを破り、飛来してきた！飛んできた槍は弦太朗に向かっており、その危機を察した弦太朗は回避した！

「あぶねえな！」

槍は弦太朗の机に刺さったが、弦太朗以下みんなは退避していた。め幸い怪我はなかった。弦太朗は刺さった槍を机から抜き出した。槍の穂先には布切れが巻かれており、字が汚い上に一部がかすんでいるが「ゆっぺはさん！」と書かれていた。弦太朗の一瞬の危機に、ゆりとユウキが駆けつけてきた。

「大丈夫、弦太朗君!？」

「弦ちゃん怪我はない!？」

「心配すんな。怪我はねえ」

「よかったあ…(やっぱり か…後できつい灸を添えてやらないとね…)」

安堵する二人だったが、ゆりの心中は別な意味で穏やかではなかった。

服の肩になんか水色のひらひらをつけた男性が「めんどくせ…」とつぶやくと、渋々立ち上がった。

「司馬子上^{しりまこじやう}つてんだ。ま、忘れてくれてかまわぶ!」

司馬昭^{しりまあき}がだるそうに紹介していたところを金髪ポニーテールのしつかりした少女にボディブローをもらい、悶絶する。彼女は司馬昭に説教した後、弦太郎に謝罪する。

「子上殿、初対面くらいまともに挨拶も出来ないわけ?これ以上子元殿^{げん}に迷惑をかけないで…あ、ごめんなさい、紹介がまだだったわね。王元姫^{おうげんぎ}よ。よろしく、如月殿」

「お…おう」

今度は眼帯が似合う蒼い戦国武将っぽい人と、真っ赤な鉢巻が似合う紅い戦国武将っぽい人が名乗る。

「オレが奥州筆頭・伊達政宗^{だてまさむね}だぜ。立派な面構えしてるじゃねえか、弦太郎。ま、Nice to meet you!」

「それがし、真田幸村と申す！貴殿のような武士に会えてうれしいでござる、弦太朗殿！」

「へえ、最近の親御さんは息子に戦国武将の名前をつけるのが流行ってるのか…」

弦太朗が感心していると、新八は叫んだ。

「だから本物の武将だから！」

次に指名された人は、ほんわかとした雰囲気の子、凛々しい雰囲気の子、黒髪の女の子であった。

「始めまして。わたし、劉備桃香です。これからもよろしくね、弦太朗君！」

「関羽愛紗だ。今は訳あって、桃香様の護衛をしている」

「おう！こっちこそな！（しかし、この学校の生徒、なんかどっかで聞いたような名前が多いな…タイムスリップしたのか、オレ？）」

弦太朗の心中はこう思っていた。

…ふと弦太朗の背後から声を掛けられた。

「まあ、この学校はアニメ、マンガ、ラノベ、ゲームなどの様々な創作作品が輩が一堂に介している、いわゆるクロスオーバー作品だ

「からな…驚くのも無理はあるまい」

「あまりそういった発言やめろおおおお！！アンタ、『メタ』って言葉を知らんのか！後ホームルーム中に早弁とるな！奏ちゃんも！」

新八に突っ込まれた青い髪の少女は、確かにラーメンのトッピングに使われる具…メンマ（しかも壺に大量に入っている）をつまんでいた。奏もしゅんとしながら食べかけの麻婆豆腐をラップに包み、机にしまう。

「驚かせてしまってますまんな。私は趙雲、星と呼んでくれ」

星はメンマの入った壺に蓋をしてカバンの中にしまったり、名乗った。

「あーこれで以上か？じゃあ如月と仲良くやれよー」

銀時が頭をポリポリと描くと、ホームルームが終わった。

その後、弦太朗は窓に向かって大きく叫んだ。

「青春キター！」

転・校・初・日（後書き）

キャストの皆さま

『仮面ライダーフォーゼ』

如月弦太郎、城島ユウキ

『銀魂』

坂田銀時、志村新八、神楽

桂小太郎、土方十四郎、沖田総悟

『ハヤテのごとく!』

綾崎ハヤテ、三千院ナギ、桂ヒナギク

『けいおん!』

平沢唯、秋山澪、田井中律、琴吹紬

『Angel Beats!』

仲村ゆり、立華奏

『戦国BASARA』

伊達政宗、真田幸村

『真・三國無双シリーズ』

司馬昭、王元姫

『真・恋姫無双』

劉備桃香、関羽愛紗、趙雲星

先・輩・乱・入（前書き）

ハヤテ：ここからいろんな作品が出てきますよ。

ナギ：ハヤテ！私たちはちゃんと出てくるんだろっな！

ハヤテ：あの…ネタバレ発言は控えろといわれてるので…

ナギ：じゃあ作者に申告してくる！脅迫して出すように言うてくる！

ハヤテ：あっ、お嬢様！使うならRPG-7よりステインガーのほうか…

新八：心配するのはそっちかよ！作者逃げてる！

先・輩・乱・入

転校初日の昼休み時間。

弦太朗は、ユウキ、新八、唯、漣、律、紬に呼び出された。唯は弦太朗に呼びかける。

「弦ちゃん、学食行くついでに、あずにゃんのいる教室に行こう！」

「あずにゃん？」

「唯ちゃんと同じ軽音部の後輩なんだよ」

首をかしげる弦太朗にユウキが説明する。

「おー、そっぴや前回『転・校・初・日』で唯が言ってたな。放課後ティータイムにも一人後輩がいるってな」

「だからその発言はやめようよ…ホームルームのとき星さんに言ったのに…」

新八が呆れたように突っ込む。

「ちなみに、放課後ティータイムのほかにも、もう一つのバンドがあるんだ」

漣が補足する。これから会いに行く「友達」に、弦太朗の心が躍り始めた。

「よし、じゃあ行くかー！」

1年A組。

ここに、唯達の言う「後輩」がいると言う。

今は昼休みだからなのか、そんなこんなで騒がしかった。

「一夏いちか！今日も稽古きこを始めるぞ！」

「だからといって教室で竹刀たけとうを振りまわすなよ、箒ほう！」

ポニーテールの大和撫子、篠しのノ之箒のほと彼女に振り回されている少年、織斑おりむら一夏いちかが稽古きこ(?)をしているその途端、一夏の背後から金髪縦ロールの英国淑女、セシリア・オルコットがバスケットを持って現れた。

「一夏さん！わたくしと一緒にご飯にいたしましょうー！」

セシリアがバスケットからサンドイッチを取り出すと、それを一夏の口に突っ込んだ！

「ムグ！モグフウ……」

「箒イイツ！」

箒の背後から声が聞こえたので彼女が振り向くと、ツインテールの活発な中華娘、鳳鈴音フヤゼンインが飛び込んできた！鈴が箒を押し倒し、マウントポジションを取る。

「あんたいつも一夏に剣道を強要するよね！幼なじみとしてあたしが絶対に許さないわ！」

「何を言う！一夏のような情弱な男を鍛えるためにそうさせているだけだ！」

「他にも道はあると思うけどね！」

キヤットファイトの後、二人は身体の一部に『IS』を起動させ、戦闘を開始した！

IS：正式名称、インフィニット・ストラトスは女性専用の飛行型戦闘用パワードスーツであるが、このように身体の一部を展開させることも出来る。何故女性にしか扱えないのかは不明だが…この辺についてはこの作品を書く上であまり必要ないと思うので割愛する。

「やめてよ3人とも！一夏は僕のものだって言ってるんだから！」

ブロンドのフレンチ少女、シャルロット・デュノアが箒、セシリア、鈴を怒鳴った後（怒るところが違うと思うが…）、セシリアに足止めされている一夏を無理矢理引っ張り出した！

「ささ、一緒にご飯だよ！」

「ちよつシャルロットさん！抜け駆けは許しませんわよ！」

「一夏！私も連れて行け！」

乱闘に紛れ、銀髪で左目に眼帯をつけたドイツ人の少女軍人、ラウラ・ボーデヴィツヒが一夏の腕を掴んだ。

「お前は私の嫁だ！嫁であるお前が私を見捨ててどうする！？」

「だから俺は嫁じゃない！」

一夏が否定する。一夏のウェディングドレス姿か…しかし白無垢姿でも…いやそつちの趣味はないぞ。

ラウラの介入にセシリアとシャルロットが阻む！

「そうですね！一夏さんは私のものですよ！」

「どうやら決着をつけなきゃいけないみたいだね！」

シャルロットの合図でセシリア、ラウラもISを起動。5人によるISの乱戦が始まった…

一方、青いショートヘアの少女、スバル・ナカジマは、親友であるオレンジ色のツインテールの少女、ティアナ・ランスターから補修を受けていた。

「ティアア、この問題わからないよー」

「宿題せずに魔道師の訓練ばかりしてたからそうなるじゃない。後で吉野家連れてってあげるから頑張りなさい」

「じゃあ頑張る」

「その意気よ、スバル。じゃあ、ここの方程式はね…」

その時ISの攻撃による流れ弾が直撃！ティアナのノートが焼けてしまった…

「…殺ス！」

殺意の波動を発したティアナは銃型のデバイス『クロスミラージュ』を装備し、ISによる五つ巴の戦闘に乱入した！

デバイスとは、スバルやティアナたち魔道師にとって必要な兵器である。例外もあるが、デバイスにはAI…つまり人格が搭載されている。ちなみにスバルのデバイスはローラーブレード型の『マツハキヤリバー』だ。基本的に魔法の補助として使用されるが…この辺についてはこの作品を書く上であまり必要ないと思うので割愛する。

「わーっ！ティア、落ち着いてよー！」

「何でこうなる！？不幸だー！」

窓際に座っていたツンツン頭の男子生徒が頭を抱え悲鳴を上げた。

その時…！

ドビュウウンッ！！

「どわー！！」

いきなりツンツン頭の耳元に電撃が走った！ツンツン頭が電撃の発射元を察する前に、やはり2発目が飛んできた！

迫り来る恐怖の前に、ツンツン頭が右手をかざすと…！！

なんと、2発目の電撃が消えた！窓の向こうを見ると、一人の女子中学生が怒りのままに稲妻を走らせていた。

「げ、ビリビリ！？」

「ビリビリって言うな上条当麻、降りなさい！この御坂美琴が今日こそケリをつけてやるんだから！」

御琴は一見この学園の中等部に通うただの女子中学生に見えるが、その実最強と評される超能力者であり、コインに電磁加速を加えて放つ「超電磁砲レベルガン」が、彼女の通り名と共に恐れられている。しかし、彼女には、上条当麻という天敵がいた。彼が右手をかざすことによつて、たとえ超電磁砲が直撃しても無効化されてしまう（異能の力を封じ込める幻想殺しのこと）。なので当麻は美琴に付け狙われているのだ…もつとも、当麻に対する彼女の本心は恋愛にも似た感情が芽…

「うっ、うっさいわね！これ以上ベラベラしゃべらないで！」

当麻は窓の下に隠れるが…

「無視すんなゴルウアアアアア！」

美琴の逆鱗に触れ、超電磁砲で砲撃！当麻を守っていた壁を粉碎した！崩れかけてる壁から当麻の声が聞こえてきた。

「だからって不意打ちはよくないだろ！？」

「なによ！？その右手があるだけアンタはマシじゃない！？さっさと来なさい！さもないとビリビリ行くわよ！」

美琴との口喧嘩に負けた当麻が叫んだのは…やはり…

「不幸だあー！」

一連の流れを、眼鏡をかけた金髪の軽そうな青年、ミハエル・ブラン（通称ミシエル）と藍色のポニーテールをした少女…

「そうだろ？なんたってアルト姫は可愛いからな！」

「姫じゃねえ！俺は男だ！」

失礼。

一連の流れを、眼鏡をかけた金髪の軽そうな青年、ミハエル・ブラン（通称ミシエル）と藍色のポニーテールをした青年、早乙女アルトが呆然と眺めていた。ミシエルがアルトに話しかける。

「アルト、どう思う？一夏のヤツ」

「……………あいつも大変だな。女にしか扱えないISを唯一動かせるんだからな…まあ俺は興味ないけど」

「……………じゃあ、私の事はどう思ってるわけ？」

背後から声を掛けられたのでアルトがびっくりして振り向くと、緑色の犬耳のような髪形をした明るい少女、ランカ・リーと、金髪で気高そうな女性、シエリル・ノームが立っていた。

「アルト君、一緒に学食行こうよ！」

「こんなサービス、めったにしないんだからね！」

「あ、いや！その…ミシエル！助けてくれええええ！！」

困惑するアルトは、ランカとシエリルにつかまり、無理矢理引っぱり出されていった。だがミシエルは助けようとするどころか…

「…災難だな」

皮肉った。

弦太朗、ユウキ、新八、唯、漣、律、紬と一緒に1年A組について。その賑やかさに漣は思わず口を漏らす。

「いつ見てもにぎやかだな、このクラスは」

律がA組について解説する。

「このA組にもいい人がたくさんいるんだぜ」

「りっちゃん、あれはどう形容したらいいのかな…」

新八が指差したのはランカとシエリルに引っ張り出されているアルトの姿だった。彼ら3人も同じ1年A組に所属している。

「だが、どっちにしても全員友達にするのが俺の夢だからな…そんなじゃいきいますか!」

弦太朗が扉を開けた瞬間…

「うーっす!」

「手を上げる」

扉を開けた瞬間、黒光りする何かを握った青年に阻まれた。その眼光は鋭く、さらに左頬には傷跡がついており、なんとなくその手の職業をしいそうな見た目だ。

あわてた弦太郎は思わず両手を上げる。

「抵抗もせずに従う、よい判断だ。射殺されたくなければ貴様の持っているもの全てをこちらに渡せ」

どうやら彼が握っているのは拳銃のようだ。不思議に思った弦太郎は少年に質問する。

「なあ、それモデルガンじゃ…ないよな？」

「肯定だ」

「弾は入っていたり…するよな？」

「肯定だ」

「一発もらったら、俺ダウン？」

「肯定だ」

.....
.....。

「完全に銃刀法違反じゃねえかあああああ！！」

あまりの事実に新八が絶叫した。無論、犯罪なのでよい子のみんなは、絶対に真似しちゃダメだぞ！

「もう一度警告する。直ちに貴様の所有物をこちらに……」

パシイーン！

突如強い衝撃と音によつて青年の頭が叩かれた！ハリセンを持った青い髪の少女が現れ、彼を引つ張り出した。

「こらそ宗介すけ！あんた初対面しかも先輩の方に向かってなんてことするのよー！」

「だが千鳥ちどり、こうでもせねば君は危うくこの男に襲われるところだ

ったぞ。俺が調べたところによるとこういう外見の人物は闘争本能が凄まじいと……」

パシイーン！

「だからって人を見かけで判断するのがおかしいのよ！大体、ただ挨拶しに來ただけなのに他人を脅迫して拳銃を向ける馬鹿はこの学校中探してもあんたくらいよ！まったく、まだ戦争ボケが抜け切れてないわけ？戦場で活躍してるアーム・スレイブって奴も学園生活ではまったく役に立たないの！」

アーム・スレイブというのは、戦場で活躍しているロボット兵器のひとつだ。今やモビルスーツとかバルキリーとかスーパーロボットとか活躍しているようだが……この辺についてはこの作品を書く上であまり必要ないと思うので割愛する。

というわけで説教しながらハリセンで何度も宗介を叩きつける千鳥。気が済んだのか、千鳥が代わって謝罪する。

「ごめんなさい！先輩たちが転校生の友達を紹介しようって時にこの馬鹿、空気を読まずに……」

「気にしなくていいよかなめちゃん」

ユウキに言われ、かなめの表情が笑顔になる。そして弦太郎の手を握った。

「あ、どうもすみません！あなたが如月弦太郎先輩ですね！私、千鳥かなめって言います！んでこっちのうずくまってる馬鹿は相良宗介（まがら）で、さっきのあれはいつものことなので気にしないでください！」

「気にしてねえよ。なんたってオレはこの学校の連中と友達になるんだからな！教室はいつていいか？」

「どうぞー！（え、まさかこの宗介までも？！）」

こうして弦太朗一行は1年A組の教室に入った。

「たのもー！」

弦太朗がやってきたのでISを展開していた少女たちも、デバイスを装備し戦闘していたスバルとティアナも、超電磁砲を幻想殺しで防いでいた当麻も、この状況を見守っていたミシエルも彼のほうに視線を向けた。

「如月弦太朗だ。オレの夢は、この学校の連中全員と友達になることだ！」

と同時に満面の笑顔と一緒に指差しポーズを決め、名乗った。

「あずにゃん、ユイにゃん、連れてきたよー」

小柄でツインテールの少女、あずにゃんこと中野梓と、小悪魔っなかのあずなぽく八重歯が可愛いピンクの少女、ユイが出迎えていた。

彼女たちが唯たちの言う後輩である。梓はもともと小学生のときからギターをやっており、唯たちに憧れ入部。放課後ティータイム

通称H T Tを結成した。ユイはH T Tとは別のバンド、Girls Dead Monster、通称ガルデモのメンバーで、そのボーカルである岩沢まさみに憧れ入部したんだとか。

なお、この学園には音楽活動や芸能活動が盛んで、ランカ・リー、シエリル・ノームにいたっては芸能界デビューまでしており、逆に人気ロックバンド・Fire Bomberがこの学園にゲストで来校したこともあるというが…この辺についてはこの作品を書く上であまり必要ないと思うので割愛する。

唯が彼女たちの前に弦太郎を連れてきた。

が…

「ゆ、唯先輩…！まさか…！」

「ヤンキーを連れてきたんですか！」

突如梓とユイの顔が恐怖に包まれた。まあ弦太郎の見た目はどう見てもアレだから…

「ヤンキーじゃねえ！^{これ}リーゼントは俺のアイデンティティなんだ！」

弦太郎が弁明するまで2分はかかった…

「弦太郎先輩がそう言うのなら私も友達になりますよ！」

「私もOKです これからも友達作りに励んでください！」

「友達になってくれてうれしいぜ！」

梓とユイが賛成してくれたので、気分は上々だ。ユウキ以下5名も同じく。

「よかったね、弦ちゃん」

弦太郎は窓に向かうと…大きく深呼吸し、思いっきり大きな声で叫んだ！

「青春、キ」

バチバチバチ…

ドビュウウンッ！！

チユドオオオオン！！！！

…次の瞬間、美琴が放った超電磁砲が弦太郎に直撃した！そして大爆発！喰らった弦太郎は真つ黒になり、自慢のリーゼントがアフロになってしまった…弦太郎はそのまま仰向けにゆっくり倒れる。

まだ物語が始まったばかりの上、主人公（？）を死なすわけにはいかないのだ、幸い命に別状はないということにしたが、それでも物凄い威力だったのでみんなが心配して弦太郎を見取る。

ユウキ、唯「弦ちゃん！」

漣、律「弦太郎！」

紬「弦太郎君！」

梓、ユイ「弦太郎先輩！」

「青春じゃなくて電気キタアアアアアア！！！」

これが超電磁砲を浴びた弦太郎に対しての新八の感想である。

数分後、美琴が駆けつけ、黒焦げアフロな弦太郎を見取った。

「ごめんなさい！ねえ、ちょっと大丈夫！？」

「は…ははは…。すげえな…あんな遠くから俺を撃ち落とすなんて、あんた今までで最高の友達だぜ」

「言ってることはよくわかりませんが…そうしてしよとさま
す」

奇妙なことを言う弦太朗の無事(?)にほっとする美琴。そして
次の矛先は当麻に向けられた…

「え、御坂さん…まさか…」

「上条、覚悟オオオオオオオオオオオオ!!!」

「不幸だアアアアアアアアアア!!!」

上条当麻の受難はまだまだ続く…

先・輩・乱・入（後書き）

キャストの皆さま

『仮面ライダーフォーゼ』

如月弦太朗、城島ユウキ

『けいおん!』

平沢唯、秋山澪、田井中率、琴吹紬、中野梓

『銀魂』

志村新八

『Angel Beats!』

ユイ

『とあるシリーズ』

上条当麻、御坂美琴

『魔法少女リリカルなのは』

スバル・ナカジマ、ティアナ・ランスター

『インフィニット・ストラトス』

織斑一夏、篠ノ之箒、セシリア・オルコット、鳳鈴音、

シャルロット・デュノア、ラウラ・ボーデヴィツヒ

『マクロスF』

早乙女アルト、ランカ・リー、シェリル・ノーム、ミハエル・ブ

ラン

『フルメタル・パニック!ふもっふ』

相良宗介、千鳥かなめ

『ハヤテのごとく!』

綾崎ハヤテ、三千院ナギ

ナギ：結局私たち前座かよ！

ハヤテ：ならこれがありますよ！このマンティス人形で…

新八：前書きに出れただけでいいじゃん！作者出番出してあげてー！

強・敵・出・現（前書き）

美琴…この回でこの学園を束ねる校長と理事長が出てくるわよ。

黒子…でもわたくしは、やっぱりお姉さまが一番ですわ！

美琴…ちょっと！まだ初出演回も決まってないのよ！

黒子…この黒子をさしおいてあの男がお姉さまとセットで

初出演を飾るなんて…許せませんわ！（シュンッ）

美琴…だからって作者へ抗議しようとするなアアア！テレポートで
！

強・敵・出・現

前回、1年A組と友達になった！

弦太朗、ユウキ、新八、唯、漣、律、紬、梓、ユイの9人は学食に向かおうとしたが、1年A組の人たちが歓迎してくれた。なぜなら……

「こんにちは」

「ここにいらしてましたか」

「おお、噂の転校生も一緒とはな」

やってきたのは大きな重箱を持ってきた茶髪の女性と金髪に赤い瞳の女性、そしてハヤテとナギであった。

「なのはさんにフェイトさん！」

スバルが声を上げる！彼女たちとは知り合いらしい。フェイトと呼ばれた金髪の女性は弦太朗に話しかける。

「あなたね？全校のみんなと友達になるって言ったあの」

「おう！如月弦太朗だ！オレの夢はこの学校の連中全員、友達になることだ！」

弦太朗の夢になのはががくすくすと笑った。

「面白い人ね…私は高町なのは。なのはって呼んでいいよ。こっちは、フェイト・テストロツタちゃん」

「よろしくね、弦太郎」

「おうよ、よろしくな！なのはさんにフェイトさん！」

皆の机を合わせ、なのはが重箱を広げると、ユウキが首をかしげる。

「でも、なのはさんとフェイトさんがいるって事は…」

「私たちが呼んだんです！噂の転校生がここに来るって！」

ティアナが説明した。ティアナとスバルは、なのはとフェイトの後輩なのだ。さらに、1年B組にもなのはたちと同じく親しい仲間がいるようだが…それは後ほど。

「さあ、始めましょう。弦太郎の歓迎会よ」

フェイトの一言で歓迎会はスタートした。

かくして、昼休みがどれくらいかかったのかは突っ込んではいけない。

そんな折、弦太郎が、

「ちよつと賢吾探しに行つてくる！」

と言つてA組の教室から出た。なのはが「あ、待って弦太郎君！」

と呼び止めようとするが、さっさと行ってしまった。なのはが心配するや、ユウキが説明した。

「彼、とても友達思いなんですよ…」

弦太郎が向かった先は保健室だった。賢吾が朝のホームルームを抜け出し、その上で午前の授業をサボタージユしたのだ。休み時間の合間を縫って探そうと思ったのだが、まだ転校初日なのでユウキに「今はこの学校を知ったほうがいいよ！」と言われ、断念した。

「おい賢吾！」

保健室に入り、ベッドの隣のカーテンを開けたが…

「…いねえか」

すぐさま保健室を出た。

次に寄ったのは学園食堂だ。生徒や先生たちが美味そうな料理に舌鼓を打っている。コックたちの作る料理の匂いに弦太郎も思わずつられてしまう。だがいずれにせよ賢吾の姿が見当たらなかったの
でこの場を後にした。

賢吾の手がかりを得るために向かったのは体育館だ。昼休みと言
うことか、館内にはたくさん生徒たちが遊んでいる。しかし、ど
こを見渡しても賢吾の姿は見つからなかった。

今度は売店だ。とは言ってもスーパーやコンビニのみならず、書
店、CDショップ、ゲームショップ、レンタルショップ、果てには
アメイトやらとら あなやらがそろっており、ショップピングモー
ルと化している。でも、やっぱり賢吾はいなかったので売店から去
った。

次の弦太朗の足が着いた先はアミューズメントパークだ。ゲーム
センター・ボーリング・カラオケ・ダーツ・ビリヤード・ライブハ
ウス・スポーツジムなどがある、学生にとっては夢のような場所だ
ある…だがそれだけあまりにも広すぎるのでスルーした。

今度はグラウンドにたどり着いた。普通に広すぎるのでそのまま
去った。

とうとう賢吾の捜索に疲れた弦太朗はカフェテラスに立ち寄った。カフェテラスには様々な人たちが集まっていた。弦太朗は空いている席を求めて歩き回った。

筋肉馬鹿たちが筋肉を見せ合っているところを「おうおう、鍛えてるねえ！」と声を掛けたり、

不良どもに「よっ！」と声掛けして逆に「んだテメエはあ！」と怒鳴られたり、

ギャルに声を掛けて「何あいつ、超古いんですけど〜」と愚痴られたり、

『絶対合格』の鉢巻をつけたガリ勉たちに「勉強頑張れよ！」と声を掛けてみたり…

「結局賢吾は見つからなかったか…」

ため息をついた弦太朗は、ちょうど空いていた『真っ赤』な椅子に座った。

…しかし次の瞬間、生徒たちがざわめき始めた。

「おい、座っちまったぞ…」

「あの方の椅子に…」

「なんて礼儀知らずだ…」

ざわざわ…

「何だよ！オレの顔になんかついてんのか!？」

その時、缶ビールを片手に持っていた、まるでダメそうな雰囲気を持つサングラスのおっさんに声を掛けられた。

「お〜いどこ座ってんだよ転校生〜！」

「赤い椅子だよ！」

当たり前のように言い放ち、まるでダメなおっさん突き放す。その時、たまたまカフェにいたユウキ、ハヤテ、ナギが弦太朗の姿を見かけるなり、彼の元へ急行した！

「ちょっと、ダメだよ弦ちゃん！早くそこどいて！」

「あ？」

ぼかんとする弦太朗の前に、ナギが説明する。

「ここはな、グループによって座ってる席が決まってるんだ。あっちは不良、あっちはガリ勉、あっちは遊び人、あっちはコギャル、あっちはオタク、あっちは筋肉、んであっちがマダオだ！」

「んなモン関係ねえ！つうか、んなの聞いたこともねえ」

「そう言うあんたも、そこに突っ立ってたらまずいんじゃないの？」

先ほどのまるでダメなおっさんが言うてきた。

「さあ、行きますよ弦太郎さん！」

ハヤテが赤い椅子から弦太郎をどかそうとする。

…その時、恐れていたことが起こった…！

現れたのは、一人の女。

赤紫色の髪をしており、切れ長の鋭い目。金色の装飾がなされた、袖のない衣装とマントを身に纏っている。そして『いる』だけで圧倒的な覇気と存在感があつた。

「す、すっげえ美人だ…！あの女も捨てたもんじゃねえな…（恍惚）」

「あの人、この学校の理事長だから…ほらいこいこいこ…！」

弦太郎は女の艶姿に興奮気味だったのでユウキが赤い椅子から弦太郎をどかそうとする。

理事長だという女は赤い椅子まで足を運ぶ。そして彼女は赤い椅子に座っていた弦太郎とユウキにこう言った。

「俗物どもが、何故こんな席に座っている？」

「ごめんなさい…！」

理事長の尊大な振る舞いの前には、ユウキも頭が上がらない。

「俗物？」

「そうだ、お前の事は転入前から聞いていたが…まさしく俗物の仲の俗物だ」

彼女は毒づくように弦太郎を言葉でなじる。

「フツ…オレは男の中の、男。そういうことか」

(…恥を知れ、俗物)

弦太郎の臭いセリフを聞いた理事長の感想だった。

その時、弦太郎の背後から何者かによって掴まれ、そしていきなり投げ飛ばされてしまった！3人が弦太郎の元に駆けつける。

「弦ちゃん！大丈夫？」

投げた人物は、金髪で長身、高貴な顔立ちをした、赤ずくめのスーツと言う浮いているにも程があるファッションセンスを持った男性であった。そして彼はこう言った。

「認めたくないものだな。自分自身の若さゆえの過ちというものを」

理事長が赤い男に声を掛けてきた。

「シヤア、遅いぞ。貴様がもたもたしているおかげであの俗物に『校長の証』を座られたぞ」

「ふっ、理事長らしくないぞハマーン」

しばらく倒れていた弦太朗はむくりと起き上がり、ヤンキー座りになってシヤアと名乗る校長に口を叩いた。

「何しやがんだこの野郎！」

「フ…騒ぐことはない…驕りという名の重力に縛られた『凡愚』を
粛清しただけだ」

弦太朗をあざけるシヤアに対し弦太朗は…

「凡愚だと？冗談じゃねえ！オレ様は『俗物』だ！」

「ちよ、似たような意味だよ！」

「え？」

ぞく ぶつ 【俗物】 世間的な名誉や利益などに心を奪われてい
る、つまらない人物。「根性」

ほん ぐ 【凡愚】 平凡でおろかなこと。また、その人。「の
身」

かつこよく言ったつもりなのにユウキにツッコミされる弦太朗で

あつた…

「馬鹿にしゃがって…オレは凡愚じゃねえ！オレは如月弦太郎だ！」

その時、背後から凄まじい物音が聞こえた。その音にが振り向くと…顔が一斉に青ざめた。

彼等の目の前に、『怪物』があわられたのだ。その姿は、体中に星座のような刻印が刻まれており、その存在感から放たれる禍々しさは尋常ではなかった。怪物はテラスのテーブルや備品を破壊しながら室内に侵入する！

生徒たちが悲鳴をあげ逃げ回る中、シヤアとハマーンは平然とその場を後にしようとした。だが弦太郎が「待て！」と呼び止める。シヤアが振り向くと…

「弦太郎君。転入前から君はよき志を持っているようだが、その志を扱いきれまい。やがてその絆は、君の期待を裏切る要因を生むかも知れん」

「何だと!?!」

弦太郎が言い返そうとするが、シヤアとハマーンの姿はもうすでになかった。

「お嬢様、弦太郎さん、ユウキさん！下がっててください！」

「ハヤテ！死ぬ気か！？」

「大丈夫ですよお嬢様…僕は死にません」

ハヤテが懐からマグナムを取り出す。そしてマグナムを構え、怪物に発砲した！だが銃弾は通用せず、マグナムの弾が切れた。

「あれも校長の手先…なわけねえよな」

「違うよ！あれは…」

「まあいいや。よくわかんねえけど、下がってる。すぐに追い払ってやらあ！」

と弦太郎がユウキとナギを後方に退かせた後、近くにあったデッキブラシを拾い、怪物に挑んだ！

「弦太郎さん無茶です！」

「無茶かどうかはやってみなきゃわかんねーだろ！」

ハヤテの制止も聞かず、ブラシを振りかざした！

「先手必勝だこの野郎！」

弦太郎がデッキブラシを怪物に振りかざすが、やはり怪物には通用せずブラシの柄が折れてしまった。そして怪物はパンチで弦太郎を吹き飛ばした！弦太郎はテラスの中庭まで大きく吹っ飛ばされた。

「うわあぁ〜！」

「弦ちゃん！」

「弦太郎！」

「弦太郎さん！」

よもや万事休すか。

…その時、怪物の目の前を巨大な何かが遮った！それは手足にタイヤがついている、黄色と黒のツートンカラーで作業用マシンをイメージさせる巨大ロボット『パワーダイザー』だった。

「大丈夫かユウキ？」

パワーダイザーに乗っていたのは、ホームルームから抜け出していた歌星賢吾であった。

「うん！」

「おい！私たちにも言ってくれ！」

ナギたちが何か言っているが、そこはスルーする賢吾。

「見て！あの『ゾディアーツ』、オリオン座よ！」

「わかっている…さがってるお前ら！」

怪物の名はゾディアーツというらしい。確かにユウキの言とお

り、体中にはオリオン座をモチーフとした星座が組まれていた。賢吾がパワーダイザーを走らせると、オリオン座のゾディアーツを殴り続ける。効き目があったようで、そのサイズ差も相まって殴られながらひるみ続ける。

「はあ…！はあ…！」

しかしコックピット内の賢吾にも疲労がたまっているようで、動かしているたびに汗をたらし、苦悶の表情を浮かべながらパワーダイザーの操縦桿を握る。

ふと、ハヤテとナギが観戦中にあることに気づいた。ナギがハヤテの耳を貸し、耳元で囁き始める。

（なあハヤテ。この作品って、クロスオーバーだよな？）

（そうですね？この回からしばらくはフォーゼメインですが）

（私たち空気が！）

さすがに勝ち目はないと悟ったのか、ゾディアーツは逃亡した。

クロス学園の倉庫の一角に、パワーダイザーを格納させた賢吾とユウキ。だが賢吾は心身ともにボロボロになっており、地面に跪いた。あわててユウキが抱きかかえる。

「賢吾君！」

「…まだ倒していない。パワーダイザーじゃその場しのぎだ」

二人が向かったのは、立ち入り禁止の廃部室だった。賢吾が室内のロッカーを開けると、突然ロッカーの内部が光りだした！しかし慣れている様子で、二人はロッカーのなかに入っていく。ロッカーの中の世界は無限大ともいえる空間であり、二人は空間の中を歩いていく。

廃部室のロッカーの先には、自動ドア、コンピュータなどがそろうた施設であり、二人だけが知る秘密基地『ラビットハッチ』であった。賢吾が自動ドアを開け、ラビットハッチの一室に入ると、内部のコンピュータを動かし始めた。ユウキが制止する。

「まって！『フォーゼ』は止めよう！」

「ヤツを倒すにはこれを使うしかない」

どうやら、ゾディアーツを倒すには『フォーゼ』という手段が関わっているらしい。賢吾は柵から持ち運びのスイッチを数個持ち、一風変わったバツクルに備わった4つのスロットにこれを挿し込む。

「でも賢吾君の体力が持たない！ダイザーの操縦だって限界だったじゃない!？」

「だがやるしかないんだ…！」

賢吾が悲壮の覚悟でバツクルを握り、外へ出ようとした時…

「おわあ〜！うわあ〜！」

賢吾とユウキの目の前にあったのは、無重力状態でふわふわ遊ばれている弦太朗の姿だった！

「…弦ちゃん！」

「何だここ、妙にふわふわすんな！」

呆れた賢吾はすぐさま壁のレバーを引き、無重力状態を停止させた。重力制御によって弦太朗は床にゆっくり降りる。あたりを見渡した弦太朗の感想は…

「なんか…秘密基地みたいでかつこいいな！」

「…後をつけたのか？」

「まさかお前があのゴリラを操縦してたとはな…！」

ゴリラではありません。パワーダイザーです。

次に弦太朗が目をつけたのは…賢吾が保持していた4つのスイッチが入ったバツクルだった。すぐさま彼の手からバツクルを奪うと、興味津々にバツクルを眺める。

「話は聞いた。これならあの化け物を倒せるんだろ？」

「貴様！それは俺の持ち物…」

奪われたバツクルを無理矢理返そうとする賢吾だったが…

「うっ！」

「賢吾君！」

いきなりふらついてしまう。

「ほらみる。今のお前じゃ無理だ！」

「だが君にも無理だ」

「やってみなきゃわかんねえだろ…ここはオレに任せろ」

弦太郎がそう言うと、バツクルを手にラビットハッチの外へ出た。
ユウキもしばらくとどまっていたが、弦太郎の後に続く。

ラビットハッチには、賢吾一人が残された。彼は拳を床に叩きつけて叫び、嘆いた。

「く…何故俺はこんな体で生まれたア!？」

強・敵・出・現（後書き）

キャストの皆さま

『仮面ライダーフォーゼ』

如月弦太郎、歌星賢吾、城島ユウキ

『ハヤテのごとく』

綾崎ハヤテ、三千院ナギ

『けいおん!』

平沢唯、秋山澪、田井中率、琴吹紬、中野梓

『銀魂』

志村新八、マダオ

『AngelBeats!』

ユイ

『魔法少女リリカルなのは』

高町なのは、フェイト・テスタロッサ

スバル・ナカジマ、ティアナ・ランスタール

『ガンダムシリーズ』

シャア・アズナブル、ハマーン・カール

弦太郎：次回でフォーゼに変身できるぜ！

賢吾：この小説でもお前にフォーゼを譲るのか…

(ゾディアーツによって破壊されたカフェテラスを、一人で掃除するマダオ)

マダオ：結局こうなるのかと思ったよ…とほほ…

宇・宙・変・身（前書き）

フェイト：弦太郎、ついにフォーゼに変身するのね。

どんな展開を見せてくれるのかしら？

なのは：ゾディアーツの正体とか事件の黒幕も気になるよね

それでは、魔法少女リリカル…

フェイト：ちよつとなのは！？いつもの癖でてるんじゃない！？

なのは：あ、あはは。ごめん…それでは、

こちらコラボレーション私立クロスオーバー学園、始まります…

宇・宙・変・身

古びて今は放棄されている教室内では、三白眼の青年がいた。彼は、片手にある何かを握っており、それをまじまじと見つめていた。

それは、目玉のような外見を持つ、不気味なスイッチだった。

青年はぶつぶつと呟く。

「…あの男め、気安くあいつに声を掛けやがって…次は絶対に仕留めてやる……！」

青年がスイッチを持って教室の外へ出ようとしたところ、

「…それは何？一体何を考えているの？」

銀髪の少女に声をかけられた。

「お前確かあいつの同じクラスの…！ちょうどいい、奴への見せしめに始末してやる！」

少女に見つかった彼はスイッチを押す。

「フハハハハ！力がみなぎるわあああ！！！」

彼がスイッチを入れた瞬間、青年の身体をまがましいオーラが包む。そして、不気味な怪物に姿を変えた…！古代ギリシャの戦士の姿をした真っ赤で大柄な体格の表面には、星座を思わせる刻印が

ある。

「仕方ない。気が乗らないけど……」
『ガードスキル・ハンドソニック』

銀髪の少女：立華奏が何かを呟くと、右手に刀身を出現させた。

「終わらせる……」

奏が手首の刀を構えると、怪物ゾディアーツに向かって前進した！ゾディアーツは手にした棍棒を振るい、奏の刀と切り結ぶ。

「如月君に何か恨みでもあるの？」

『お前には関係ねえ！とつと潰されるがいい！』

奏とゾディアーツの戦いは校内の中庭に及んだ。

大勢の生徒が逃げ惑うなか、ゾディアーツが棍棒を振り回したところを奏の刀が切り払い、彼女が隙を突いて急所めがけて刀を突き出したところをゾディアーツが手にしたシールドに防がれると言う攻防一体の戦闘が繰り広げられていた。

しかし奮戦及ばず、振るったゾディアーツの得物が奏のわき腹を殴打し、奏はその場に吹き飛ばされる！そしてゾディアーツは奏の首を掴み、締め付けはじめた……！

「ぐっ！ううう…」

『これで終わりだな！成仏されるがいい！』

…しかし、ある男の参上によって奏の危機は逃れた。

「てめえオレのダチに何しやがる！」

そこには、ラビットハッチからバツクルを持ち出してきた弦太朗の姿があった。

「如月君？逃げて…」

しゃがれた声で弦太朗の名を呼ぶ奏。するとゾディアーツが話しかけてきた。

『お前が如月弦太朗か？』

「あ？」

『だから…お前が如月弦太朗かと聞いている！』

「おうそくだ！この学校の連中全員と友達になるのが夢の男だ！」

『とぼけるな！つまらん戯言で俺の大切な女を汚しやがって！』

「大切な奴？何言ってるのかさっぱりわかんねーよ！」

「…お前は知らんだろうがな、お前はゆりっぺに声をかけられた瞬間、一本の槍が飛んできたのを覚えているだろう？あれは俺がやったのだ！」

「ゆりっぺだつて!？」

弦太郎はホームルームで出会った仲村ゆりのことを思い出していた。どうやら彼は、ゆりに大変心酔しているらしい。

『如月弦太郎…貴様だけは許さない!!』

「へっ！これはこっちのセリフだぜ！」

そういつて弦太郎はバックルを構えるが…？

「ようし！………あ、あれ？やっべー！使い方聞くの忘れた！」

「如月君、何してるの！あっ」

ゾディアーツに拘束されていた奏が放り投げられ、そのまま地面に叩きつけられる。迫り来るゾディアーツを前に弦太郎、なす術なしか！？

するとそこに、ラビットハッチから弦太郎をおってユウキも駆けつけてきた。

「そのフォーゼドライバーを腰に巻きつけるの！こっ！」

ユウキが弦太郎からバックルを無理矢理奪うと、無理矢理彼の腰

につけた！そしてユウキが笑顔で熱くこう言う。

「そしたらスイッチ入れて！そうすればあなたに『宇宙のパワー』
がみなぎるの。『変身』よ、弦ちゃん！」

「う、宇宙のパワー？」

「そう！その後変身って言うってレバーを入れて！」

そういつてユウキはフォーゼドライバーの4つのスイッチを無理矢理ONにする。彼女が遠くに離れると、弦太朗にアドバイスする。困惑する弦太朗にユウキは「いいから早く！」と叫ぶ。

「お、おう！！よくわかんねえけど、なんかよくわかった！！」

.....3.....

.....2.....

.....1.....

変身！！

その瞬間、弦太郎の姿が変貌した！

スペースシャトルのような配色に、ロケットを思わせる頭部とオレンジ色の目。両肘と両膝に × のマークがあり、背中にはバーニアがある。宇宙飛行士のような姿をしたヒーローだ！

「な、なんだかわかんねえけど………宇宙キタアアアアアアア！」

「そう、それが『フォーゼ』よ！早くあの化け物をやっつけちゃって！」

「なるほど、フォーゼね……」

弦太郎^{フォーゼ}が納得すると、ゾディアーツの前に拳を向ける。

「タイムン張らせてもらっぜー！！」

まずフォーゼが先手必勝とばかりにゾディアーツに殴りかかる。数度殴られたゾディアーツだが今度はシールドでフォーゼを押し出し、今度は棍棒で倒れたフォーゼを殴りつける。見かねたユウキが叫ぶ。

「左側のオレンジのスイッチ押して……！！」

「え、これか？」

フォーゼがオレンジのスイッチを入れると、電子音が鳴り、右手がロケットモジュールに変わった！

「お！？おおお ロケットおー！」

右手のロケットがジェット噴射し、慌てふためいてマウント状態から脱出するフォーゼ。それはゾディアーツに当たり、大きくよるめいた。その後暴れるように噴射し、ゾディアーツを殴り続け、やがてゾディアーツもフォーゼを両手で捕らえた。だがロケットの推進力によって二人は上空に飛ばされてしまった…

今度は学園の駐車場に吹き飛ばされたフォーゼとゾディアーツ。

さすがに精神的にやばいのでフォーゼがロケットスイッチを戻すと、同時にロケットもはずされた。「うえゝ気持ちわり」と酔っ払いながらも戦闘を続行する。

「なんか武器はねえのかよ！？」

次の打開策を練るフォーゼ。今度はロケットの隣の青いスイッチを押す。その瞬間、電子音と共に右足にランチャーモジュールが搭載された。

「おおゝ！おわ！」

だがランチャーから暴発したかのようにミサイルが乱射され、近くの車に命中！車数台が破壊された…

ジリリン！ジリリン！

「な、なんだ？」

右側の黒いスイッチのアラームが鳴り出したのでそのスイッチを触ると、左手にリーダーモジュールが装備された。モニターには賢吾の姿が映し出されていた。

『リーダーもなしにランチャーとは…学校ごと破壊するつもりか？
…今お前が持っているリーダーでターゲットを特定しろ』

「お、おう、わかった」

その後敵に吹っ飛ばされたフォーゼだったが、バーニア噴射で何とか態勢を整える。そして賢吾に言われたとおりにリーダーのキーボードを入力し、ゾディアーツに向ける。その後モニターにロックオン表示が出る。

「ロックオン！喰らえ！」

ランチャーモジュールからミサイルを連射し、今度はちゃんとゾディアーツに命中する。爆発の衝撃でゾディアーツが倒れた。

『よし、接近戦だ。右足のスイッチを交換しろ』

賢吾からそういわれると、ランチャースイッチを取り出し、別の水色のスイッチを挿入し、プルトップ式のスイッチを上げる。すると、右足がチェーンソーモジュールに変わった！

「お、カッコいいじゃん…！いつくぜええ！」

フォーゼがゾディアーツに接近すると、チェーンソーが起動。蹴るたびに回転する刃で敵を切り裂く！そして敵がひるんだうちにバ

「ニア噴射とムーンサルトで身体を回転させ、その勢いによる攻撃で敵を切った！」

「おっしやぁー！」

だがゾディアーツの星座の刻印からビームを乱射し、それはフォーゼに当たった！フォーゼは大きく吹っ飛んでしまう。立ち上がったその隙を見たゾディアーツが再びビームを撃ったが、それは回避される。

「何度も同じ手喰らうかよ！」

フォーゼがチェインソースイッチをOFFにし、今度はロケットスイッチをONにし、再び右手がロケットに変わる。ロケットに振り回されつつも、上空に飛び立つフォーゼ。

「こいつはなんだ!？」

フォーゼが目を付けたものは、レーダーの隣の黄色いスイッチだ。黄色いスイッチのダイヤルを回すと、今度はフォーゼの左足にドリルモジュールが付けられた！

「おおっ、いいんじゃない？よしっ、こいつでとどめだ!！」

『おい待て如月!』

「つたく、うるせえな!！」

賢吾が通信で割り込んできたので、レーダーのスイッチを切る。

そしてフォーゼドライバーのレバーを回すと、『LIMIT B

REAK』の音声が発生。ゾディアーツに狙いを定める。

「喰らえ！ロケットドリルキック！！」

フォーゼが叫ぶと、上空からロケットの噴射で超加速！足のドリルによってゾディアーツを貫いた！

着地後、ドリルが地面にえぐり込み、「うおおあゝ！」と叫びながら回転するが、しばらくして止まった。

ゾディアーツが倒され、スイッチが転がった。

戦いが終わったときにはユウキ、奏が駐車場に駆けつけた。ユウキはそこら辺に転がっていた不気味なスイッチを押した。

「やったね弦ちゃん！」

「助かったわ、如月君」

「おう！」

フォーゼとユウキは拳を打ちあう友情の証を行う。そして二人でガッツポーズをとった。

「イエイ！！」

ちょうど賢吾もパワーダイザーに乗り込んで現れたところであった。

「如月弦太郎…！」

「よう賢吾、やったぜ！ま、オレ様にかかればこんなもんだぜ……うわぁー！」

「名前で呼ぶなー！」

「うわぁ〜」

「え……ちょっと！？」

賢吾はパワーダイザーの腕でフォーゼを掴み、振り回した。ユウキは困惑し、奏は微かながらも微笑みをこぼした。

「う……ここは……？」

廃屋となった教室の廊下で青年が目覚めた。彼の近くには仲村ゆりがいた。

「……気が済んだ、野田^{だの}君？」

「そつだ……俺はゆりっぺのためにだけに……如月弦太郎を」

「馬鹿言ってんじゃないわよー！」

パシィン！！

突如野田の頬を叩くゆり。

「聞いたわよ。あんた化け物になって学校騒がしたんですって？せつかくうちのクラスに転校生が来たからって挨拶があれだって？あんた頭悪すぎ、どうしようもない馬鹿ね！」

「えー！そんなー！」

がっかりする野田。彼はゆりに心底惚れており、ゆりに友達になるうと言った弦太郎に対して暴力で宣戦布告。弦太郎にゆりを奪われたくないとばかりに、拳句の果てにゾディアーツになって大暴れしたのであった。

「ほら、あんたに会いたい人がいるわよ」

野田の目の前に現れたのは弦太郎であった。野田は土下座をし、弦太郎に謝る。

「す、すまなかつた！！」

だが弦太郎は怒るうともせずこういった。

「お前がしでかしたことが悪いと思っただんなら、気にはしねえよ。お前はゆりの言うとおり、確かにどうしようもねえ馬鹿だよ。だがオレはそんなとこ、嫌いじゃねえぜ。次ダチ作るときは、普通に挨拶すればいい…オレがお前のダチになってやるよ」

彼の言葉に、野田はゆりに抱きついて涙を流した。

「うおー！ゆりっぺ〜」

「ちよ、気持ち悪いわね！近寄るな！！」

一方、校長のシャア・アズナブルは、理事長のハマーン・カーンと対話していた。

「聞くがいい、シャア。あの小僧がこの学園で暴れまわったらしい。転入早々、随分とやらかしたな」

「ふ。やはりな…彼にスイッチを渡して正解だったよ。あの野田と言う男、実に使いやすい男だった」

「さっきは絆だの志だの下らんことだと抜かしていた分際で」

「あれは道化だよ…それにしても如月弦太郎、実に興味深い男だ」

シャアは不敵に笑った。

宇・宙・変・身（後書き）

キャストの皆さま

『仮面ライダーフォーゼ』

如月弦太朗、歌星賢吾、城島ユウキ

『Angel Beats!』

立華奏、仲村ゆり、野田

『ガンダムシリーズ』

シヤア・アズナブル、ハマーン・カーン

桂：俺の出番は!？

銀時：しかたねえだろ。ここんとこフォーゼがメインだし。

桂：ならば俺達もライダーになろう!ついてくるのだ、銀時!

桂：テンション、フォルテッシモ!

銀時：キバっていくぜ!

銀時…はっ？！ゆ、夢か…

放・課・時・間（前書き）

唯：いいな〜ユウキちゃんに賢吾君。私もフォーゼが動くところ見たかったなあ〜

律：だったらこうしようぜ！ロケットドリル頭ぐりぐり〜！

（ぐりぐりぐり…）

透：わあ！律！やめろ！クレヨンしんちゃんのみさえママが！

（ぐりぐりぐり…）

梓：ちょっと唯先輩も、どさくさに紛れてやめてくださいよ！

紬：うふふ…女子同士のスキンシップは素晴らしいわね（惚）

放・課・時・間

午後の2年B組の教室では銀時が担当する国語の授業が行われていた。

「まったく、いつまであの3人サボってんのかよ」

銀時が気にしていたのは弦太朗、賢吾、ユウキの3人の行方であった。昼休みのあと、5時間目は彼の授業であったが始まったときはすでに3人はいなかった。念のため、奏とゆりに捜索に出させたが、いつまでたっても帰ってこない。

その時、チャイムが鳴つたのと同時に5人が教室に戻ってきた。

「おいおせーよオメーら。もう授業とつくに終わってんだよ」

賢吾、ユウキ、奏、ゆり「すみませんでした」

銀時に怒られる5人。そして銀時はさらに弦太朗を叱った。

「如月、いくら全校の奴らとダチになりたいからって冒険しすぎだぞ。気持ちはわかるが、そんなんできたら1日で赤緑からブラック・ホワイトのポケモン646種類全部覚えられるよコノヤロー。俺だつてほしいんだもん」

「すみませんっス」

「つつわけで如月、後で話がある。放課後職員室に来い」

職員室に呼び出された弦太朗は銀時から話を受けていた。

「お前は今日からうちの学生寮に住むことになる」

「学生寮？」

「ああ、そつだ。今日お前の部屋に荷物を届けてやった。鍵については寮長が」

「今日からそこに住むのか？おっしゃ、楽しい学園生活の始まりだぜ！」

何かを決心した弦太朗は猛ダツシュで一気に職員室から出て行った。

銀時が一言。

「人の話を最後まで聞けエエエエエエエエ！！！！」

放課後、たくさんの人たちが下校している。部活に向かう者もいれば、すぐさま帰宅する者もいる。その中、ただ一人学生寮を目指す弦太朗であつたが…。

「広すぎてわからねええええええええええ！！」

そう、この学園は大草原のごとく広い。まず、学校としては弦太郎が通う高等部、中等部、小等部に分かれ、大学や幼稚園まである。学ぶ学科も普通学科、農業、工業、商業、芸術、スポーツなどが学ばれている。グラウンドと体育館は東京ドーム数个分の広さはある。部活においても運動部と文化部合わせて100を軽く超えるほど存在する。弦太郎も行ったことがある、学園が運用する学食やカフェに至ってはメニューも規模もそこらの居酒屋に匹敵する。購買部が運営する売店は扱う品物が多いデパート形式である。敷地内には劇場・映画館・図書館、生徒専用のゲームセンター・スポーツクラブ・カラオケボックス・ライブハウス・ボートリング場など様々な施設がある。

おまけにあまりの昂りに、銀時から学生寮の場所も聞いていない。自業自得ですな。

「弦ちゃん、一体なにがあったの？」

「おーい、どうしたんだこんなところで叫んで？」

突如、遠くから声をかけられた。弦太郎が振り向くと、ユウキと長い金髪で純朴な感じの青年がいた。腰には鞘に納めた剣を差している。

「ユウキ！それとあんた誰だ？」

「俺は2年B組のスタン・エルロン。よろしくな！」

「B組？」

B組と聞いて、弦太朗がスタンが同じクラスだと知る。だがここで弦太朗とユウキに疑問が…

「あれ、スタン君自己紹介しなかったっけ？弦ちゃんと同じクラスだっけこと」

「ああそうか！お前、俺が転校してからずっと寝てたんだよな。だから『転・校・初・日』に出れなかったんだな！」

「そうそう、昨日もよく眠れたし、今朝もいつも通り妹に起こしてもらって学校で眠くなって…って俺の初出演がこの話ってあんまりだなおい！一人だけ風邪引いて欠席みたいでひどすぎるだろ！！お前等俺のこと空気扱いしてたのか！？」

スタンが激しく突っ込みを入れる。ユウキが弦太朗に声をかける。

「それはそうと、弦ちゃんは学生寮に行くの？」

「おう、そうだ」

「だったら、俺たちが案内してやるぜ。妹と一緒に暮らしてるからな！…あ、弦太朗にユウキちゃん、待ってくれ」

…ふと、スタンの腰から声が聞こえた。スタンは腰に差している剣を取り出し、それに耳を傾ける。

『スタン、何をポケットとしてる。早く寮に行くぞ』

「わかってるけどさ、ディムロス…この人、困ってるようだし、ほっとけないよ」

『何を言う。お前この間「ほっとけないから」と言っただけで徹夜でバイトの手伝いして眠れず、次の日には昼休み終了までに寝坊して単位を取られたということをおぼれたのか?』

「覚えてるって…でも今度は失敗しないからさ」

『フン、勝手にしろ』

「へいへい」

スタンがデймロスと呼ばれた剣を再び腰に差す。

「おい、大丈夫か?なんか独り言をしゃべってたみてえだが…」

「ん?ああ、大丈夫。こつちのことだから気にしないでくれな」

デймロスの声は弦太郎にはまったく聞こえなかったようだ。剣に向かって話をする人間は当然いない。こいつ危ない奴だなと思った瞬間であった…しかも出会い頭「おい、どうしたんだこんなところで叫んで?」と弦太郎に言ったスタンが剣を相手に会話するのは説得力に乏しい。そこでユウキが弦太郎の耳を貸す。

(スタン君の剣について触れないであげて)

(ん?ああ)

「さ、行くつぜ。寮まで案内してやるよ」

弦太郎はユウキとスタンに案内されるまま学生寮に着いた。しかしその建物は15階建て、しかも3棟という大きなものであり、まるでマンシヨンのような佇まいだ。弦太郎が驚愕する。

「すつげえな！近くで見るとでけえ！」

「大きいでしょ〜」

「みんなここで暮らしてんのか？」

「ああ、年齢ごとに3棟に分けているんだぜ」

突如、『夢であるように』の着メロが流れ始めた。

「あ、俺か」

スタンが取り出したのは、やはりディムロスだった。スタンはディムロスの鏢の宝石を押すと、まるで携帯電話のように耳を傾ける。

「もしもし、リリース？」

『あ、お兄ちゃん。今、寮？』

「ああ。そっち部活は終わったか？」

『うん、今日は早めに切り上げたよ。今はあたしの部屋』

「そうか…今日うちのクラスに転校生が来てな…今これから住む寮の案内をしてあげただぜ」

『よかったね、お兄ちゃんに新しい友達ができて。いつかあたしにも紹介してよ』

「はいはい、わかったよ」

通話(?)を終えると、ディムロスを腰に差す。剣型の携帯電話など聞いたことがない。やっぱりこいつ危ない。

「弦太郎、これから俺は自分の部屋に向かうけど、せっかくだからお前の部屋の荷物、片付けるの手伝うよ！アドレスを教えるから後で呼んでくれ！」

「私も後でスタン君と一緒に行くからね！」

「おう、悪いなユウキ、スタン！」

スタンと一時別れた弦太郎は思った。自分の部屋に行くための鍵が必要だろう。鍵はおそらく寮長が預かっているはずだ。まず寮長に会いに行こうと考えた。

寮長室に着いた弦太郎はドアをノックし、寮長室に入った。

「失礼しやーす。鍵取りに来ただけど…又オー!!」

弦太郎が見た光景は、まさしく散乱した部屋であった！お菓子の袋やパックは散らかったままで、ラノベやマンガが読み漁られてお

り、おまけにゴミ袋がパンパンに溜まっている！なぜか宅配ピザ（しかもピザハトである）の箱が数ケースがきれいに重なっているが…

「汚え部屋だな…本当に寮長がいるのか？」

弦太朗が次に目をやったのは、やはりピザを食べながら寝転がってプステ3でゲームをやっている、黄緑色の長い髪に金色の瞳をした女だ。数本のベルトが付けられた白い服をまとい、どこことなくミステリアスな雰囲気醸し出す女は、弦太朗の気配に気づくと振り向いた。

「…ん？何だお前」

「オレか？オレは如月弦太朗！夢はでっかくこの学校連中と友達になることだ！あんたが寮長か？」

「違うぞ。C・C^{シー}だ、如月弦太朗。いや…フォーゼ」

女はそう名乗ると、弦太朗がその呼び方を不思議に思う。フォーゼに変身してゾディアーツと戦って数時間も経ってないのに、C・Cが弦太朗のことを知っていた。

「え…なんでオレのこと知ってるの!？」

「私は何でも知っているからな…」

「よくわからん」

しかし不思議な人間だと弦太朗は思った。その時…

「C・C・！あれほど部屋を汚すなど何度も言ったはずだ！」

突然声が聞こえてきたので弦太朗が振り向くと、黒い髪をした高貴な感じの青年が立っていた。

「さあ、知らんな」

「知らんで済まされるか！…ん？お前は誰だ？」

C・C・を怒っている青年が、弦太朗に気づく。

「如月弦太朗だ。いつかこの学園の連中と友達になる男だ」

「なるほど…お前が噂の転校生か。俺はルルーシュ・ランペルジ。高等部3年にして寮長だ」

「寮長！あんたが！？」

「信じられないだろうが本当だ。しかし今回はやけにシスコンキアラが二人も初出演を飾るな」

今のC・C・の発言が気に入らなかったのか、ルルーシュが彼女を黙らせる。

「ピザ女は黙っている。如月と言ったな。部屋の鍵は俺が持っている、ほら」

そう言つと、ルルーシュはポケットから鍵を取り出した。

「ありがとな！」

もう用はなくなったので弦太郎は寮長室から出ることにした。扉を閉めた時、ルルーシユの声が聞こえてきた。

「C・C・！さっさと部屋を片付けろ！」

「嫌だ、断る」

「そんなこと言うのならピザを食わせんぞ！」

「何だと！口の利き方に気をつけてもらうぞ！グランドクロス！！」

「なにを〜！ガレンツウハジン牙連蒼破刃！！」

意味不明なバトルが始まったが、弦太郎はスルーした。

鍵を開けてドアを開けると、そこには新世界が広がっていた！

ピカピカの床に清潔な白い壁。冷蔵庫、エアコン、洗濯機が完備されている。現在部屋には弦太郎の私物が入ったダンボールが置かれているが、結構広く、二人一緒に暮らせそうだ。

これが今日から住む自分の部屋なのか。

ピンポン！

インターホンがなり、弦太郎が振り向くと、聞き覚えのある青年

の音が聞こえた。

「弦太朗、手伝いに来たぜ。お邪魔していいか？」

「（あの声はスタンだ。手伝いに来てくれたのか）おう、今開けるぜ」

弦太朗が扉を開けると、ユウキ、スタンと、見慣れない3人が弦太朗の部屋に入ってきた。

「おじゃましまーす！弦ちゃん、どう、新生活は？」

「なっかなかいいんじゃない!？」

「そう…よかった」

ユウキの表情が笑顔になった。

「大変そうだと聞いたから、人手を増やしてきたぜ。ほら」

スタンに呼ばれると、茶髪のやや二枚目な青年、天然気味な金髪少女、銀髪の理知的な少年が弦太朗の部屋にやってきた。

「俺はロイド・アーヴィングだ！よろしくな弦太朗！」

「コレット・ブルーネルだよ。これからもよろしくね！」

「僕はジーニアス・セイジ。あえてうれしいよ！」

3人の内、ロイドとコレットは弦太朗やスタンたちと同じ2年B

組である。弦太朗がジーニアスをじろじろ見るなり、こつこつぶやいた。

「ん？小学生が混じってるのか？」

「し、失礼だな！僕はこれでも飛び級してるんだよ！高等部の1年A組に！」

「12歳は小学6年生よ」

「う…」

ユウキに突っ込まれ、ちょっと顔を赤らめるジーニアス（12）。ロイドが仕切る。

「さあ、片付けをするか！早くしないと、夜寝ようにも寝られないぜ！」

「おおおー！」

弦太朗、ユウキ、スタン、ロイド、コレット、ジーニアスが作業を開始してから1時間後。片付けは順調に進み、夜7時になる頃には全ての荷物が片付いた。その後、ユウキとジーニアスが手製の料理を振舞ってくれた。

「みんなお疲れ様。ほら、じはんよ」

「お、サンキュー」

「ユウキの手料理を受け取るロイド。」

「ほら、僕のも」

「いつも悪いね、ジーニアス」

スタンさ皿によそったジーニアスの手料理はとてもおいしいそうだ。
弦太郎が彼の料理を食べると…

「う、美味えじゃねえか！」

「でしょ?」

「小学生扱いして悪かったな」

「いや、気にしてないって」

「コレットちゃん、お茶持ってきてくれないか?」

スタンがコレットに頼むと「わかったよ」と言って冷たい麦茶を
持ってくるが…

何もなしどころでつまづいてしまふ…?」

「きゅあめ!」

がしゃーん!!

「.....」

麦茶は弦太朗の頭にかかった…リーゼントがびしょ濡れだ…

ユウキ「だっ、大丈夫弦ちゃん!？」

ロイド、スタン「大丈夫か弦太朗!」

ジーニース「怪我してない、弦太朗!？」

「へっ、これぐらい怪我の内にはいんねえさ…」

「あつっ…ごめんなさい、弦太朗君!」

コレットがひたすらに謝る。だが昔から彼女のことを知っている
ロイドとジーニースは…

「そんなに気にするなよ、コレット」

「ま、コレットらしいけどな…」

いっしょで、楽しい転校初日が過ぎていくのでした

放・課・時・間（後書き）

キャストの皆さま

『仮面ライダーフォーゼ』

如月弦太朗、歌星賢吾、城島ユウキ

『テイルズオブデスティニー』

スタン・エルロン、ディムロス、リリス・エルロン

『テイルズオブシンフォニア』

ロイド・アーヴィング、コレット・ブルーネル、ジーニアス・セ

イジ

『コードギアス 反逆のルルーシュ』

ルルーシュ・ランペルージ、C・C・

『銀魂』

坂田銀時

『Angel Beats!』

仲村ゆり、立華奏

ルルーシュ：ルルーシュ・ランペルージが命じる！この部屋を片付けろ！

C・C………馬鹿かお前、ギアスは私に通用しないと云ったはず…

セシリア：どうしてわたくしが

ルルーシュ先輩の部屋を片付けなくてはいけませんのー！？

伝・説・神・話（前書き）

司馬昭：今回のアバンタイトルは俺らがやんのかよ……
めんどくせ。

王元姫：子上殿。如月殿や坂田先生みたいに何か言えぱいから。

司馬昭：何か一言言えぱいんだな…よし！

元姫を見ると、俺が元気になるぞー！

王元姫：……………お仕置きよ。

司馬昭：ま、待て！こればっかりは許してくれ〜！

伝・説・神・話

朝。

人通りのない路地裏ではちょっとしたいさかいが起こっていた。

「ちょっと！しつこいわよ！」

「そうです！やめてください！」

活発はるそうな黒髪ストレートの佐天さてん涙子なみこと、花畑はなづかの髪飾りかざりをした初はつ春飾利はる。中等部に通う中学一年生で、二人は親友同士である。

現在二人は朝の通学途中、人気のない路地裏にて街のチンピラに絡まれていた。無論、彼女たちは拒否している。

「いいじゃんかよ、少しぐらい付き合ってくれたってよ」

「俺らが君たちに夢見させてあげようって言うんだぜ！」

しかしチンピラたちは全然引き下がらない。

「いい加減にしてください！」

「しつこい男は嫌われるわよ！」

とうとう二人が逆上した。ふと、そこに…

「その嬢ちゃんの言うとおりだ」

佐天と初春の目の前には、一人の高校生の姿があった。彼は、リーゼント、Ｔシャツ、短ラン、ボンタンと言う古臭い容姿をしていた。チンピラの一人がリーゼントを睨みつける。

「なんだてめえは！？何しに来たんだコラア！」

だがリーゼントはこう返答した。

「そいつらはオレの友達だ。友達に手を出す奴は許しちゃおけねえ」

「はあ！？」

彼の返答にすつとんきょうな声を上げたのは佐天と初春のほうだった。彼女たちには、会ったこともないのに「オレの友達だ」とか変なことを言うリーゼントの友人になった覚えはまったくくない。

(ねえ初春。あたしたちこんなのと友達になったことなんてないよ)

(そうですか、佐天さん？私にはあまり悪そうな人には見えませんが…)

二人が話していると、チンピラが一気に呵成にリーゼントに襲い掛かった！

「野郎ども、やっちまえ！」

チンピラどもとリーゼントの戦いは10分に及んだ…

「「助けてくれて、ありがとうございます！」」

初春と佐天が、先ほどの喧嘩に勝利したリーゼント、如月弦太郎に感謝する。しかし佐天がある疑問を抱く。

「でも、どうしてあたしたちを友達と決めつけたんです？」

「この学校の連中全員と友達になることがオレの夢だからな。見捨てる事はできねえ」

弦太郎が初春たちの制服をちょん、と触る。それは自分たちが通う黒楼州学園の校章であった。弦太郎はこの校章を視認し、友達だといっていたのだ。しかし、逆にこれがつけられていなかったら今頃初春たちはチンピラに捕まっていた。

「これからお前らとオレはダチだ、よろしくな！」

「「はい！よろしく願います！」」

3人は握手の後、友情の証である拳の打ち合いをした。しかし弦太郎の表情にはある焦りが見えていた…

「「やっべええええええ！！早く学校に行かねえと遅刻しちまう！！！」

通学路を走っているとき、幸村、ロイドの2人と出くわした。

「ロイドに幸村じゃねえか。どうした、お前等！」

「昨日早寝したから、朝で二度寝しちまったよ」

「それがし、鍛錬のしすぎで夜中4時に就寝したのでござる！」

要は寝坊だった。ロイドはともかく、幸村の場合はやりすぎである。

弦太朗、ロイド、幸村が校門にたどり着いたのは始業時間ギリギリであった。彼等の前に、サスペンダーを身につけている、アンルズの田中にそっくりな教師が待ち構えていた。彼は弦太朗の服装に目を付ける。

「おい、制服はどうした？」

「ああ、こないだ転校してきたばかりッスから」

「転校？あゝお前か、校長先生に齒向かったという生徒は」

弦太朗の言い分に、彼はこの間の出来事を思い出していた。しかし思えば、弦太朗にとっては転校初日で、ユウキと再会した日でもあり、賢吾をはじめ、ハヤテ、唯らと出会った日でもあり、そして初めてフォーゼとしてゾディアーツと戦った日でもある。

3人はアン　ールズ田中にこっぴどく怒られた後、教室に入った。

今日の授業が終わったあと、弦太朗はB組の副担任に呼び出された。

彼女はリフィル・セイジ。ジーニアスの姉で、弟と同じく銀髪でスタイル抜群なお姉さん。クールで大人っぽく、頼りになる理想的な女性である。こんな形での登場なのは、別に後付け設定であったり、たまたま出すのを忘れたわけではない！

「何ですって？もう一度言っただけで御覧なさい…！」

い、いえ…なんでもありません…（汗）

「誰と話してんすか、先生」

「あ…いいえ、なんでもないわ」

取り乱したりリフィルがコホンと咳き込むと、話すべきことを弦太朗に話した。

「部活つすか!？」

「そう。弦太朗君はここに来て数日経つでしょう？ここは個人の自由や個性を尊重する校風だから別に入らなくてもあまり支障はないけれど、これからの将来のためにもあなたには部活に入ってもらいたい」

「ってことは、俺が所属する部活が決まるまで見学しろってことか？」

「そう言うことになるわね。私や坂田先生に相談してもいいから、部活が決まったら生徒会に届出を出して」

そういったリフィルが弦太郎に差し出したのは一枚のプリント。それには『入部届』と書いてあった。

「しっかしどこにするか迷っちゃうね」

どこの部活に入ろうか迷っている弦太郎。いろいろな部活を見学してきたが、自分にあった部活が見つからない。

【剣道部】

ここには、2・Bの志村新八、桂ヒナギク、伊達政宗、1・Aの篠ノ之箒が所属している。

まずはここだと弦太郎が入部した途端…いきなり黒髪の少女・シヤナと箒が襲いかかってきた！

「あぶね！」

あわてて避ける弦太郎。そして、二人を制止しようとする少年が弦太郎の元を訪れた。

「すみませんでした！…シヤナ！箒！なんてことすんだよ！」

「うるさいうるさいうるさい！こいつ道場破りよ、悠ゆう二に！」

「当然だ！不埒者は成敗せねばならん！そのリーゼントがそうだ！」

道場破りだの不埒ものだの言われた弦太郎が逆ギレする。

「おい、いくらダチだからって言って悪いことがあるぞ！」

「「ダ…ダチじゃない！（照）」」

そこは何故か間をおいて否定するシヤナと箒。どうやらツンデレな様子…

「「誰がツンデレだ！（照）」」

その時、頬に傷のついた、ヤクザのような剣道部の顧問である片倉小十郎かたぐらこじうらが政宗に怒鳴りつけた。理由は竹刀を両手の指の間に3本ずつはさむと言う無茶な持ち方をし、それで稽古をしたからであった。

「政宗様！稽古中は六爪流はやめるとあれほど言いましたのに！」

「やれやれ小十郎。いつもの小言は聞き飽きたぜ」

だが教諭である小十郎の政宗に対する態度がおかしい。

「片倉先生の一族は政宗君の一族に代々使える家系なんですって。私も最初は驚いたけれど」

すると弦太朗の元におしとやかな女性、志村妙^{たえ}がやってきた。新八の姉だと言うので、この人はなんかまともそうだ。

「新ちゃんの知り合いなのね…私は志村妙。新ちゃんの姉よ」

「おう、よろしくな！」

その時、床が突然開き（！？）、ゴリラのような面構えをした男の生首が出てきた！

「そこの君い！お妙さんに気安く話しかけるとはいい度胸だ！この近藤^{こんどう}勲の目が黒いうちにはお妙さんに近づく奴に」

「何勝手に入ってるのお前…ゴリラはとつとルワンダあたりに強制送還してもらえばどう？」

にこやかに、そして不気味に笑みを浮かべる妙が持っていたのは…薙刀だった。彼女は薙刀を近藤の首に向ける。

「え！？お妙さん…冗談やめてくださいよ…」

「妙先輩のストーカーよ、討伐して！」

「ぎゃあああああああああああああああ…！！！」

ヒナギクの合図と共に変質者を始末するシャナと箒。最近の女は恐ろしいものだと感じた…

【ラグビー部】

ここは、2 - Bの真田幸村が所属している。

数人の部員がグループを組んで練習していた。そんな最中、弦太郎の視界に入ったのは…！

「この馬鹿者があああああ！！！」

毛皮の兜を纏った男が幸村を殴り飛ばした！その飛距離はなんと120メートル、飛びすぎだ！幸村は壁にぶつかって大きく飛ばされる。

「この馬鹿者が！驕りと慢心は己の最大の敵！心得よ！」

無駄に暑苦しいこのおじさんは武田信玄^{たけだしんげん}。幸村にとっては教師と生徒の枠を超えた師弟関係にある。

ふと、立ち上がった幸村が信玄（お館様と呼ぶ）の名を呼ぶと…

「お、お館様！」

「幸村！」

「お館様あー！」

「幸村あ！」

「お館様ああ！」

…なんか疲れたので帰ろうと思う。

【軽音部】

唯達と親しい弦太朗は、音楽室に足を運んだ。

…ドアに近づくと、ギターやドラムなどの演奏が弾けるようになっていく。

弦太朗は演奏の邪魔にならないよう静かに扉を開けた。中では女の子達が楽器を持って演奏をしていた。

そのうち、ギターを弾いている茶髪のショートカットの女性が歌っていた。彼女の歌声はとても良く、聴き入ってしまった。

しばらく弦太朗は、彼女の歌を最後まで聴き続けた。曲が終わり、彼女達は弾くのを止めたが、どうやら弦太朗の存在に気づいた様子だ。その人物、ユイが話しかける。

「あ！弦太郎先輩、見てたんですか！？」

「おう、なかなかよかったぜ」

「えへへ…どうも、弦ちゃん いらっしやうい！」

唯に言われ、音楽室に入る弦太郎。みんなから歓迎される弦太郎だが、一人、見慣れない少女がいた。先ほどの茶髪の女性だ。

「さっきの演奏、とても最高だったぜ」

「ありがとう。君がユイから聞いた転校生か：ガルデモのボーカルを務める岩沢いわさわまさみだ。よろしくたのむ」

岩沢が弦太郎に挨拶し、握手する。そして彼女がついでにガルデモのメンバーを紹介する。

「ほかのメンバーも紹介しておくな。リードギターのひさ子に、ドラムの入江に、ベースの関根だ」

「……よろしくおねがいします！」「」

「よければ、ご一緒にどうぞ」

上機嫌な弦太郎に、細があるものが注がれたティーカップを薦めた。弦太郎がそれを取り、飲む。

「…紅茶じゃねえか」

「ええ、これは最高級の茶葉を使った紅茶で、一杯1万はするわ」
「ぶっ！！！！」

いきなり紅茶を嘔き出してしまう弦太郎。あまりの値段に、目玉も飛び出そうだった。

「お、お前等、こんなもんガブガブ飲んでんのか?!」

唯「そっだよ」

漣、岩沢「まあな」

律「そっだぜ！」

梓、ユイ「そうですよ!」

やや困惑する弦太郎の前に、やはり紬があるものを薦めた。

「紅茶と入部届けよ」

「お、おう、ありがとな。ムギ」

…というのが現状である。弦太朗はとりあえず中庭を散歩してみた。

そこには、不良とおぼしきグループが集まっていた。だが、そのグループの中、ただ一人『妙』な奴を見かけた。

まず全身真っ赤な格好で、怪物のようないで立ちをしている。頭に角が二本生えており、その形相も凶悪と言っていいほどの強面で体色とあいまって恐ろしい印象を受ける。人間離れしているその姿は（ていうか誰がどう見ても人間には見えない）、まさしく赤鬼と呼ぶに相応しい人物であった。

本来、常識ある人間なら関わらないべきだが、もともと型破りな弦太朗にとっては屁でもない。その赤鬼のいるグループに聞いてみることに…

「よう、お前らなんの部活やってんだい？」

次の瞬間、赤鬼の仲間と思われる不良がこちらを睨みつけてきた！

「ああーん！？何ウチの総長に眼つけてんだコラア！！」

「てめえ、俺らを誰だと思ってやがる！」

そのうち、不良の一人が赤鬼に指差して言った。

「この方はなあ！この学園の『四天王』の一角に君臨されておられる方なのだ！」

「このお方の名前を言ってみるお！」

いきなり質問される弦太郎。この学園の四天王だなんて聞いた事がない。

「名前？…赤鬼じゃねえのか？」

なんとなく思いついた言葉で答えを言ったが…

…それは、赤鬼の逆鱗に触れる事態となった。

「な…！ふざけやがって！俺様は赤鬼じゃねえ…！テメーらやっちまえ…！」

赤鬼が激昂すると、周りの不良十数人を呼び寄せた！やがて事態は弦太郎VS不良十数人のケンカという展開となった。

「俺はただ何かやってるのかって聞いただけなのに、何でケンカに発展するんだよ…！」

それはもともとあなたが悪い。

しかしそれでも、1対多数という状況であるにもかかわらず、弦太郎は次々と不良をなぎ倒していく。その姿に赤鬼も思わず見入ってしまう。そしてこんな言葉を投げかけた。

「噂どおりに普通に強えかと思ったらテメー、こないだ入ったばかりの転入生か…気に入ったぜ！特別にこの俺様が相手をしてやらあ！！！」

赤鬼が立ち上がると、弦太朗の前に歩み寄る。

そしてこの人物のファンなら誰もが知ってるあのセリフと決めポーズで名乗りを上げた！！

「俺、参上！！！」

そう、奴こそこの学園最強とされる四天王の一人、モモタロスなのだ！

「てめえが勝つたら、この俺様をダチにしてもいいぜえ！！！」

「おもしれえ！お前を倒さねえと、この学校の連中友達になれねえからな！！！」

そういつて弦太朗はフォーゼドライバーを腰につける。そして…！

.....3.....

.....2.....

.....1.....

変身！

「宇宙キタアアアア！」

フォーゼが背伸びし、大きく叫ぶ！！

「テメーが例のバケモンを倒したって言う奴か！相手にとって不足はねえ！」

モモタロスが得物の大刀・モモタロスオードを抜く。

「俺は最初から最後までクライマックスだぜ！」

「如月弦太朗！タイムン張らせてもらっぜ！」

こうして、フォーゼVSモモタロスの戦いが、ついに幕を開ける

の
だ
っ
た
…
!

伝・説・神・話（後書き）

キャストの皆さま

『仮面ライダーフォーゼ』

如月弦太郎

『とあるシリーズ』

初春飾利、佐天涙子

『テイルズオブシンフォニア』

ロイド・アーヴィング、リフィル・セイジ

『戦国BASARA』

伊達政宗、真田幸村、片倉小十郎、武田信玄

『銀魂』

志村新八、志村妙、近藤勲

『ハヤテのごとく!』

桂ヒナギク

『灼眼のシャナ』

シャナ、坂井悠二

『インフィニット・ストラトス』

篠ノ之箒

『けいおん!』

平沢唯、秋山澪、田井中率、琴吹紬、中野梓

『Angel Beats!』

ユイ、岩沢まさみ、ひさ子、入江、関根

『仮面ライダー電王』

モモタロス

スタン：zzz…

リリス：おにいちゃん！いつまで寝てるの？

今回出番がなかったからって、寝るのはあんまりよ！

スタン：ZZZZ…

リリス：しょうがない…ならルーティさんから見よう見まねで覚え
た、

「ブラッディ・ローズ」を…

(ガバツ)

スタン：や、やめてくれ！そんなの喰らったら俺、永眠だよ…

因・果・応・報（前書き）

ゆり：弦太朗君ことフォーゼとモモタロス先輩のバトル！
仮面ライダーのキャラクターによるドリームマッチよ！

奏：…食べる？

（モモタロスに激辛麻婆豆腐を薦める奏）

モモタロス：なんだこりゃ（パクッ）

モモタロス：きゃあああああああああ！！
なんてモン食わせるんだてめえ！！

奏：…ごめんなさい。苦手だったのね…

因・果・応・報

前回、転校したばかりでどの部活に所属するべきか悩んでいた如月弦太郎は、学園に君臨する「四天王」の一人と名乗るモモタロスと出会う。しかし弦太郎がモモタロスを赤鬼呼ばわりしたことが原因で彼を怒らせ、不良と戦う羽目になってしまう。だが十数人の不良を逆に返り討ちにする弦太郎を見て、モモタロスは「俺に勝ったらダチにしてもいい」と宣言し、弦太郎に宣戦布告する。そして弦太郎も「お前を倒さなきゃ全校生徒と友達になれない」とタンカを切り、フォーゼに変身するのであった。

「俺、参上！」

「宇宙キタアーーー！」

モモタロスが自慢の大刀「モモタロスオード」を構えると、フォーゼに向かって振りかざした！だがフォーゼは横に側転し、モモタロスの一撃をかわす。その隙にフォーゼはランチャースイッチをONにし、ランチャーモジュールを展開させる。

そしてモモタロスに至近距離からのミサイル爆撃を浴びせた！遠くに吹っ飛ばされるモモタロス。

「ヘッ！さすがごないだのバケモンを倒した奴、そこらの不良どもとは違うってか…面白くなってきたぜ！」

「よし、もう一発だ！」

フォーゼが再びランチャーを構える。だがミサイル発射寸前、モタロスがモタロスオードを投げつけた！大刀はミサイルに直撃し、誘爆によってフォーゼが爆発に巻き込まれた！

「おわあ〜！」

うつぶせに倒れるフォーゼ。ちょうどモタロスオードが爆風によってモタロスの元に戻ってきたので、再び大刀を手に取る。

「行くぜ行くぜ行くぜ〜！」

モタロスが上空にジャンプし、急降下してフォーゼに止めを刺そうとしたその瞬間、逆にフォーゼから高速の体当たりを食らう！

「うお！何が起こってやがった!？」

実は、フォーゼは倒れている途中、ランチャースイッチをOFFにし、ロケットスイッチをONにすることで、あらかじめ右手をロケットモジュールに変えていたのだ。ロケット噴射によってモタロスに突進。その為モタロスの奇襲は失敗に終わったのである。

「へへっ、デカイロケットにはこういう使い方もあるんだぜ！」

得意げにアストロスイッチのいいところを語るフォーゼ。だがモタロスの気概も負けてはいなかった。

「思ったよりやるみてえだな…だがここからが本当のクライマックス

スだぜ！」

フォーゼとモモタロスが戦っている最中、遠くからゴスロリの衣装を纏った黒髪に赤い瞳の少女が見守っていた。

彼女の名は、五更瑠璃^{ごせうるり}。通称、黒猫^{くろねこ}。

中等部に通っているが、見かけに反してオタク趣味であり、今回のこの行動を取っていたのも、フォーゼがゾディアーツを倒したと言う話が黒猫の耳に伝わり、一目見ようと高等部にやってきたからであった。

「ふうん…あの赤いの…さすがは40年前より代々、悪しき魔の手から世界を救った伝説の勇者たちの眷属ってところかしら」

一般人にしてみればわけのわからないことを言う黒猫。しかし彼女は本気である。

「でも、私の目的はあの噂の白いの…腕力だけが取り得の赤いのはそろそろ見納めね」

黒猫はくすくす薄ら笑いを浮かべながら戦いを見守り続けた。

フォーゼとモモタロスはまだ戦いを続けていた。お互い体力を消耗しているものの、まだ完全に決着がついたわけではない。

「そろそろ片をつけるぜ！」

モモタロスがモモタロスオードを構えなおすと、気合を入れる。

「行くぜえ！俺の必殺技、番長スペシャールツ！！！」

モモタロスがフォーゼに向かった大ジャンプした！そのとき…！

「おわ！！！」

二人の間にいきなり変わったバイクに乗った賢吾が乱入してきた！賢吾の登場にあわせ、不時着しずつこけるモモタロス。

「こんなところで何油を売っている！」

「何しやがんだこの野郎！」

賢吾は戦いを邪魔されて激怒したモモタロスを見無視し、フォーゼに向かって叱った。

「おい如月！そんな下らんことに勝手にフォーゼドライバーを使うな！」

「だけどこないだお前にも言ったろう、お前には無理だつてな」

「おい無視すんな！聞いてんのか！？」

スルーされて激怒しているモモタロスが無視し、賢吾はあることをフォーゼに伝える。

「そんなことよりも如月、お前に呼び出しがかかっているぞ」

「呼び出し？」

「おい、今朝のことを知らないのか？」

そういつて賢吾はフォーゼに手紙を渡す。その内容は…

二人の女子中学生を拉致した。一人で来い。
さもなければ、二人の命の保障はない。

学園の外れにある廃工場。

そこには、数十人のチンピラが集まっていた。彼等の中心には、氷のように冷めた面をした男が居座っていた。そして天井には、チンピラの一人によって二人の女子中学生がロープで吊るされていた。

「元就^{もとなり}さん、こんな風でいいすかね!？」

「我が手間暇かけて作り上げた『日輪財団』に泥を塗った罪は重いのだ。それ以上の報いを彼奴に与えねば我の気は治まらぬ」

毛利元就と呼ばれた男が縛られた中学生を見上げる。

「離してください!！」

中学生の一人が怒鳴るが、元就は聞く耳持たない。

「籠の中のおうむめ、うるさいぞ。殺されなくなかったらその口をふさぐことだ」

その時、弦太朗が自転車を駆って廃工場を訪れた。

「毛利さんよ、来てやったぜ!！」

「一人で参ったか。今朝は我が舎弟が世話になったよつでなによりぞ」

その時、弦太朗はあるものに目を付けた。

それは元就の手のものによって天井に縛られた、今朝チンピラに絡まれ、自分の手で救出された初春と佐天だった。

「「弦太朗先輩!!」」

「初春に佐天!?!てめえ、何しやがった!」

「文字通りの意味よ。そなたが我が日輪財団の看板を汚したその結果ぞ」

初春と佐天を捕縛した理由は、弦太朗に対する報復であった。元就が「やれ!」と命じると、数十人のチンピラが懐から何かを取り出した。それは奇妙な形をしたUSBメモリであった。彼らはメモリのボタンを押すと…

『MASQUERADE』

という音声が鳴り出した。そして彼らはそのメモリを自分の肌に差し込んだ。

その瞬間、彼らの顔が変化した!彼らの顔が黒地に骨髄のような覆面を被った姿に変貌したのだ。不気味な覆面のチンピラが木刀や鉄パイプを振るい、一斉に弦太朗に襲い掛かる!

「こいつ等もゾディアーツか?!にしちゃ、ちつとおかしいな」

弦太朗も応戦する。覆面チンピラが長い鉄パイプを突いてきたのでこれを掴むと、チンピラごと投げ飛ばす!

「なんだよ、バケモンになってもたいしたことねえじゃんか」

だが背後からチンピラが弦太朗めがけて木刀で叩いた！その場にうずくまる弦太朗に、初春と佐天が叫ぶ！

「先輩！」

だが弦太朗はもうろうとした意識の中、元就を睨みつける。

「くだらねえな…たった一人を相手に、大人数でリンチしようと考えてんのかオレには理解できねえ…」

「しもべなど、しょせん捨て駒よ！」

そういつて元就は、チンピラが持っているものと同じ形状のメモリを取り出す。そして自分の肌にメモリを挿入した。

『ZONE』

次の瞬間、元就はピラミッドのような化け物に変身した！

「てめえもバケモンだったのか！手足もねえくせに、叩き潰してやる！」

弦太朗はすぐさま懐からフォーゼドライバーを取り出そうとしたが…

「あ…フォーゼドライバーがねえ！賢吾に返したままだった！」

モモタロスと戦っていたあのとき、賢吾に返していたことを忘れていた！

「仕方ねえ、ステゴロ再開とするか！」

そういつて弦太朗は覆面チンピラに殴りかかった！だが…

「な…消えた!?!」

なんとチンピラの姿が消えてしまったのだ！いや、それだけではない。周りを見渡すと、数十人のチンピラの姿が消えていた。

「どうなってんだ一体…?」

弦太朗が周りをきよるきよるとしている間…

なんと次のチンピラの攻撃が弦太朗を襲った！そして時間差で現れたチンピラに袋叩きにされ、ついに弦太朗は倒れてしまった…

「おい、これ普通に卑怯じゃねえか…?」

弦太朗はその場に倒れ、目を閉じる…

怪物から変身を解いた元就はメモリを手にしていた。そして倒れたままの弦太朗に近づき、あざける。

「我に勝利しようなどという幻を見たか。貴様の失策は、何も知らずに我に牙を剥いた事よ」

初春と佐天は涙を流し、恩人の名を叫んだ…

「先輩！？せんぱあーい！！」「」

弦太朗が倒れてから1時間は経ったのだろうか。

いつの間にか廃工場に来ていた黒猫が、大の字になって気を失っていた彼の元を訪れた。そして彼女はこうつぶやいた。

「まだよ…あなたはまだ死んではならない」

黒猫が近くにあった鉄パイプや木箱などを弦太朗の周りに置き始めると、今度はろうそくを取り出し、火を灯した後、やはり彼の周

りに置き始める。そして自分の懐からハンカチを取り出し、弦太朗の顔にそれをかぶせた。

…何かの儀式でもするのだろうか？黒猫が弦太朗の前にひざまずき、

「生死を司る神よ。この者に今一度の生を…」

という電波な言葉をつぶやきながら祈るような行動をした。それを数分続けた後、そして彼女が弦太朗の懐から携帯電話を取り出すと、誰かに通話し始めた…

因・果・応・報（後書き）

キャストの皆さま

『仮面ライダーフォーゼ』

如月弦太郎、歌星賢吾

『仮面ライダー電王』

モモタロス

『とあるシリーズ』

初春飾利、佐天涙子

『俺の妹がこんなに可愛いわけがない』

黒猫

『戦国BASARA』

毛利元就

黒猫：作者、私の出番って、これだけ？

次の回までに出さないと呪いをかけるわよ？

桐乃：そんなことよりもあたしの出番出しなさいよ！

この邪気眼がこの作品じゃ先出してどづいうこと！？

黒猫：……………今何か聞こえたかしら？

紅・白・合・戦(前書き)

翔太郎：よう、読者のみんな。本編には出てきてねえけど、

『仮面ライダーW』よりハードボイルド探偵・左翔太郎だ。

フィリップ：同じく『W』よりフィリップ。翔太郎の相棒だ。

…翔太郎。ここでもカッコつけたがるなんて、相変わらず半熟だね。

翔太郎：るせえ！

亜樹子：そうそう…私は鳴海探偵事務所の所長、鳴海亜樹子よ！

ていうか本編に出てないなんて私、聞いてない！

竜：照井竜だ。確かに俺達は出てきていないが、

何故フォーゼがドーパントの相手をしている？

亜樹子：えーっとそれはね竜君。道具を使って化け物に変身するのは、
って、

ゾディアーツと似てるっしょ！あと作者がWが好きだから！

フィリップ：ほう、興味深い…ゾクゾクするねえ。

翔太郎：は、ははは…おっと、時間みてえだな。俺たちは楽屋に戻るか…

『こちらコラボレーション私立クロスオーバー学園』始まるぜ！

紅・白・合・戦

前回、モモタロスを「ダチ」にするため、それをかけてバトルしていた弦太朗であったが、賢吾に呼び出され、自分が今朝助けた初春と佐天が捕まっているという事実を知る。学年を超えた「ダチ」を助けるため、弦太朗は一人初春・佐天誘拐の主犯である「日輪財団」の党首・元就のもとを訪れる。そこで元就配下のチンピラと戦うことになるが、賢吾にフォーゼドライバーを返却したことを忘れた上に、元就がゾーン・ドーパントに変身し、その特殊能力によって弦太朗は敗北してしまった。その後、フォーゼのことが気になっていた黒猫が、気を失っていた弦太朗の元に訪れた。

翌日、如月弦太朗は学園の保健室のベッドに横たわっていた。そして彼は目覚める。

「じ、じじは...」

「気がつきました?」

弦太朗が視界に入ったのは、金髪のおっとりした、優しげな美人であった。

「私はこの学園で保険医を務めているシャマルです」

「ハッ：そつだ、初春と佐天は：いてえ！」

ベッドから降りようとするが、体に激痛が走る。シャマルは彼が心配で止めようとする。彼女はこの仕事をしている以上、これ以上他人が傷つくのが嫌な女性だ。その為弦太郎に無理をするなと諭される。

「その体では無理よ、如月くん。ここは絶対安静に하십시오。あなたはあの時倒れていたところを、2・Bの皆さんに助けられたの」

「といても、誰かさんからの電話で呼び出されてお前をここに運んだわけだよ」

とってあわられたのは銀時であった。そして銀時のほかにもユウキをはじめとする2・Bの生徒が弦太郎の元にやってきた。

「しかしテメーも無茶すんなあ：中学生までダチにして、その上捕まった中学生を助けにこんなんでよ」

「弦ちゃん、いくら友達思いだからといって危ないよ！あと少しで手遅れだったんだから」

ユウキも弦太郎を強く咎める。小学生以来の仲だったから、弦太郎の性格のことも彼女はよく知っているのである。

「そつか、弦ちゃん天使になるのか。南無阿弥陀仏」

「勝手に殺すなあああ！この話のキーキャラに向かって不謹慎だ

「ろおおおおー!!」

新八のほうは手を合わせてお経を説く神楽を咎めていた。いいコンビだ。

そんな時、ロイドがあることを提案した。

「なあ、日輪財団に殴りこみにいかねえか？」

「あ、俺も賛成」

「どうして殴りこみに行くんだ？危ないぞ！」

「そうだ。チンピラはともかく、あの元就って奴、結構油断ならな
いという話だ」

スタンも賛成するが、漣と愛紗は納得が行かず、ロイドを追及する。

「けどよ、ダチをこんなにした奴は絶対ゆるさねえ。ダチを助けねえと男が廢るぜ！」

「頑張つてね、ロイド、スタン君」

スタンも弦太朗の危機に憤慨していた。二人を応援するコレット。

「如月君、後は任せて。あのときの恩をまだ返していない」

奏も弦太朗に諭す。彼女はオリオンゾディアーツの件の際、弦太朗に助けられたからだ。

「私たちは今から弦太朗を助けるんだ。ツラ、足引っ張るなよ」

ナギの辛辣な単語に桂は立ち上がった。

「ツラじゃない桂だ！」

「でもヒナギクさんと苗字被るじゃないですか」

「そうそう」

ハヤテとヒナギクにも突っ込まれ、桂は自分の相棒であるエリザベスにしがみつく。

「エリザベスウウウ！俺はクラスのみんなに嫌われてしまった！どうすればいいんだっ」

するとエリザベスはプラカードを取り出した。プラカードにはこう書かれていた。

『大丈夫ですよ桂さん。この作品が何かの事情で連載終了にならない限り、絶対桂さんにも出番が回りますよ』

「本当か！おおおお、やっぱりエリザベスは最高だああああ！」

『いえいえ』

この二人は放っておこうと思う。

「はぁー、めんどくせー」

風向きが日輪財団へ殴りこむ方向が強まっていく中、司馬昭は面倒くさそうにため息をついた。

「子上殿、転校してきたばかりとはいえ、友人を助けに行こうとか思わないの？」

「いつから如月と俺は友人になつたんだよ」

「だったらこうしてあげる（ぐにゅ）」

「うお！元姫、それは…わ、わかったよ！やりやあいんだろ！？」

渋る司馬昭に呆れた元姫がある行動を取った…なんと司馬昭の下半身の握りつぶした！さすがに司馬昭も焦り、しぶしぶ従う。彼女の行いに、愛紗も顔を赤らめた。

「な…どこを触っているんだ、元姫殿！（照）」

ちなみに元姫がどこを触ったのかはお察しく下さい。

皆が日輪財団への殴りこみについて話し合っている中、御坂美琴が保健室にやってきた。

「あたしも暴れさせてもらっていいかしら？」

「あんだ中等部の…」

「ええ、あの二人はあたしの友達よ。助けられてありがとって

言いたいところだけど……まだ言えない。初春さんや佐天さん、そしてあなたをボコボコにした代償、あいつに払ってもらわないとね。借りはあとで返しておくわ」

その時、美琴の背後から、突然ツインテールでどこか卑しい雰囲気を持つ中学生が彼女に抱きついてきた！

「そのときはお姉さま、この白井黒子が全身全霊をもってお守りいたしますわ〜！」

「うわ、何すんのよ黒子！テレポートで背後からくつつくなあー！」

美琴がしがみつく黒子を離そうとするが……二人の関係は良好なようだ。

「如月ー、その前に土方殺していいかー？」

「おい今なんつった？場合によっちゃ地獄見せるぞ」

こちらの沖田と土方の関係は相変わらずお世辞にもいえなさそうだ。

「あらま、転校早々たくさん友達作りやがって……だが嫌いじゃねえぜ如月。担任として俺も暴れさせてもらうわ。ツたく、男なのに惚れちまったじゃねーか」

銀時も弦太朗の尻拭いに参戦する。そう、この男は後々弦太朗と夜中二人で……

「何邪なこと考えてんだナレータアア！惚れたってのはそう言う意味じゃねーぞ！」

「如月君、転校して間もないのにもうこんなに…慕われているのね。私の心配は要らないということかしら？」

「へへ、ありがとなお前等」

2・Bの心意気に、安心した弦太朗であった。

その放課後、体が癒えてきた弦太朗はラビットハッチにいた。賢吾とユウキからゾディアーツやドーパントについて聞かされていたため、その手がかりを求めてここに来たのだ。話は初春と佐天を助けたその日の昼休みにさかのぼる…

賢吾「ゾディアーツというのはアストロスイッチで宇宙空間に存在するコズミックエナジーを引き出し、マテリアライズさせることで変化する。ドーパントは地球の記憶を模したガイアメモリでドーピングすることでその能力を再現させる。いずれも風紀委員が対応しているが…」

弦太朗「お、お前…カタカナばかり使えばいいと思ってるんだろ！」

ユウキ「つまり！ゾディアーツはスイッチ、ドーパントはメモリを使うことで変身するの。使えばとんでもないパワーが得られるってわけ。奴等を倒すにはそのスイッチをOFFにしたり、ガイアメモ

りを破壊するしかないの！」

弦太郎「わかった…要はスイッチやメモリを持った野郎を見つげりゃいいって事だな？」

賢吾「君がやるうというのか？」

弦太郎「ああそうだ。お前にも認めさせてやるよ、このオレのやり方をな！」

と言うわけで、弦太郎はここにやってきたのだ。ラビットハッチは見慣れないものがたくさんあるため、好奇心に駆られて本を読み漁ったり、辺りを見回したりした後、いろいろな装置をいじりまくる。そして弦太郎があるボタンを押したとき、基地のハッチが開いた。

そして弦太郎は、驚愕の光景を目にする！

ハッチの向こうには、広大な宇宙空間が広がっていた…

「なんだこれ…まさか…嘘だろ…？いや、そんなことがあるはずねえ」

あまりの絶景に、思わず心を奪われ涙を流してしまう。弦太郎はあわてて涙を拭く。

ちょうどその頃、ユウキがラビットハッチに入ってきた。彼女は基地内で弦太郎を目撃する。

「げ、弦ちゃん！体大丈夫なの！て言うかあんた何勝手に入ってるの？」

「オ…オレはただ、怪物の手がかりを探していてな…どうしても賢^や吾に負けたくねえんだ。男の意地だ！」

ユウキが「呆れた…」とため息をつく。さらに弦太郎はユウキに質問する。

「でも、どうして外に宇宙が見えるんだ？」

「ここは月。月面基地『ラビットハッチ』よ！コズミックエナジーでこの月面基地と学校をつないでくれてるの」

「へえ。やっぱりここは宇宙なんだ…」

弦太郎は目を輝かせながら、再び外の宇宙を見た。そしてユウキは語る。

「ねえ、フォーゼの使い方、どうして私が教えたと思う？弦ちゃんなら賢吾君を助けてくれるって思ったからだよ。小学校の時、いつも自分のことより友達のこと一生懸命だった。あの弦ちゃんならっつてね…」

学園管轄内のオフロード用のサーキット場では賢吾がスペースシヤトルのような形をしたフォーゼ専用バイク『マシンマッシグラ』

を駆っていた。虚弱体質でフォーゼになれない賢吾は、せめてマツシグラーだけでも乗りこなして見せると、必死に走らせていたのだ。だが突然サーキット場に自転車に乗ってきた弦太朗が乱入してきた！

「うおおおおお〜！待ってくれ賢吾〜！」

弦太朗の自転車はマツシグラーに追いついていた。

「オレの負けだ！この事件を解決するにはオレじゃ無理だ！」

「フン、結局俺に認めさせることは出来なかったようだな！」

自転車、しかも凸凹だらけで舗装されていないオフロードを走っているにもかかわらず、スーパーバイクであるマツシグラーと対等に渡り合う弦太朗の脚力に、賢吾は驚きの色を隠せなかった。

しかし弦太朗の自転車はコース上から脱線！近くの障害物にぶつかり、弦太朗はコース外に飛ばされてしまった！

うつぶせに倒れる弦太朗に、賢吾は言葉を投げかける。

「無茶するからだ。わかつたらもう俺に近寄るな」

その時ユウキがやってきた。彼女が見守る中、弦太朗は賢吾を説得する。

「お前の代わりは務まらねえが…お前を助ける事は出来る！知ってしまったんだよ…お前の背負っている重荷のことを…」

「まさか…！お前あそこに！？…貴様！」

賢吾がマツシグラーから降りると、弦太朗の胸倉を掴み、彼を睨んだ。

「今のままで、お前のやりたい事ができるのか？頼む…オレにしか出来ないことをやらせてくれ！」

しばしの沈黙の後、賢吾は呆れたように弦太朗を放した。そして弦太朗の携帯の着メロが鳴ったのでそれを手に取り、電話をする。

「……………なんだって？ちよつと待ってる！今すぐ行く！」

弦太朗は携帯を切ると、賢吾とユウキに話した。

「…初春と佐天の居場所がわかった。2・Bの連中もそこにいる。オレちよつと行ってくる！」

「あ、弦ちゃん！ちよつと待って！」

弦太朗とユウキがある場所に向かって走り続ける。そして賢吾はただ一人残された…

とある廃工場の近く。

「うおおおお〜！…！」

弦太朗とユウキがそこまで走っていた。そこには頭に薔薇を載せた、ゴスロリ衣装で黒髪赤目の女子中学生が待っていた。

「あいつらはどこなんだ?!」

「ちよちよちよ!落ち着いて!!」

ゴスロリに掴みかかったのであわててユウキが制止する。

「あなたが電話くれたの?」

「そ、そう。あなた…面白いから」

ゴスロリが薄ら笑いを浮かべながら弦太朗を指差す。ゴスロリの言動に普通に退いた。

その時賢吾がフォーゼドライバーを持ってやってきた。

「賢吾」

「これを使え。ただし、名前で呼ぶな」

「細かい男だ…行くぜ!!」

そういつて弦太朗はフォーゼドライバーを腰につける。そして…!

……………3……………

……………2……………

……1……

変身！

「宇宙キタアアアア！」

フォーゼに変身した弦太郎が背伸びし、大きく叫ぶ！そして廃工場に向かって突進していった。

後ろからフォーゼの変身シーンを、赤鬼のような姿をした人物が見ていた。彼は得物の大刀を抜き、こうつぶやいた。

「ヘッ、俺様にも活躍させろってんだ」

廃工場では2・Bが日輪財団と対峙していた。天井には初春と佐天が吊るされていた。彼女が叫ぶ。

「御坂さん！白井さん！」

美琴と黒子が財団を仕切る元就に向かって叫ぶ。

「弦太郎さんの仇を取りに来たわよ！観念したらどう？」

「さあ、初春と佐天さんを解放なさいませ！お姉様は怒らせると怖いですよ！」

だが元就は何食わぬ顔で応じない。

「それは出来ぬ相談だな…やれ！」

元就の命令と共にチンピラ数十人一斉がガイアメモリを取り出し、それを自分の肌に挿入した。

『MASQUERADE』

その瞬間、黒地に骨髄のような覆面を被ったマスカレイド・ドールに変貌した！マスカレイドたちが木刀や鉄パイプを振るい、一斉に美琴たちに襲い掛かる！

「先手必勝ネ！ほあっちやあああああ！！！」

神楽がまず先制攻撃として助走をつけてから飛び蹴りをかまし、マスカレイドを吹っ飛ばした！

「ガードスキル、ハンドソニック」

奏が手甲から刀身を出現させると、マスカレイドに向かって突進。マスカレイド数人を切り捨てた。切られたマスカレイドは爆発した。

「DEATH BITE！」

「大車輪！！！」

六刀を構えた政宗と、二振りの槍を握った幸村がそれぞれの得物を振るい、敵を上空へと打ち上げる！

「もらったぁー!!」

愛紗が二人が打ち上げた敵に向かって大ジャンプ！青龍堰月刀による一閃で蹴散らした！

「死ね土方アアアア!!」

「グバツ！総悟、殺す!!」

「なにやっとなんじゃお前らああああ！やる気あんのかあああ!!」

沖田の放ったバズーカが土方に誤爆！土方と沖田がケンカを始めたので新八が突っ込む。

「うららららあ!!」

「お嬢様には指一本触れさせません!!」

二人がどこからそんなものを持ち出してきたのか、ゆりはショットガン、ハヤテはマシンガンを連射し、マスカレイドを一掃する！ナギはそんな二人を応援していた。

「ゆりー！ハヤテー！いいぞ！その調子だハヤテー！」

「お前どんだけハヤテ好きなんだよ!!」

銀時のツッコミが響く。

「^{「コガレツザン」}虎牙烈斬！！」

ロイドが二刀を構え、マスカレイドを切り裂く！だが一体が倒されても数がぞろぞろと集まり、一向に減らない。スタンが手にする剣『デймロス』が状況を皮肉る。

『さすがはチンピラ、数だけはある。いくら切り崩しても数が減らん』

「だったら片っ端からやつつけてやる！断空剣^{ダンクウケン}！！」

スタンがデймロスを構えると、まるで竜巻のように振り回した！竜巻は周囲のマスカレイドを巻き込み、粉碎してゆく。

「さあ、ビリビリ行くわよ！！」

美琴はコインを弾き、電磁加速によってレールガンを発射した！

だが、レールガンが直撃する瞬間、数人のマスカレイドが消えてしまった！そのためレールガンはかわされ、木箱の山を破壊した。

「何！？どこへ消えたの…？」

「わたくしと同じレポートが使えるのかしら…？そんなドーパントなんて聞いたことありませんの…」

すると美琴と黒子が戸惑っているうちに瞬時に数十人のマスカレイドが美琴たちに襲い掛かってきた！そのまま袋叩きにされる2 - B。

「うわああああ!!!」

初春と佐天が絶望を目にし、叫んだ…

「間に合ったか!？」

そんな時、フォーゼたちが廃工場にやってきた。そこには数十人のマスカレイド相手に苦戦している2・Bと、元就が変身したピラミッド状のドーパント・ゾーンがいた。

『いまさら援軍が、無駄な足掻きだ』

「気をつけてくださいまし!そのドーパント、結構出来ますの!」

黒子がフォーゼに向かって叫ぶ。ドーパントという言葉にピンと来たフォーゼは賢吾にあることを持ちかける。

「怪物についてはお前がよく知ってんだろ!？作戦をお前が立ててくれ!そしたらオレがそれをやる!」

賢吾はしばし考えた後、「…わかった」と返答。ハンバーガー型メカ『バガミール』にカメラスイッチを挿入し、それを起動させる。するとバガミールが偵察モードに変形した。

「作戦を考えている間、持ちこたえておけよ!」

戦況を見守っていたユウキが「…よし!」と小さくガッツポーズ

を取った。

その時…

「待てやこの野郎！！この俺様を差し置いてドンパチとは黙ってられねえな！」

すると廃工場の入り口からモタロスが現れた！フォーゼが突然の援軍に驚く。

「よう『坊主』！お前のクラスが大ピンチだって言うから来てやったぜ！」

「オレは坊主じゃねえ、フォーゼだ！しかしモタロス…よく来てくれたな！」

「へッ、まあな…」

そして、電王ファンなら知っているあのポーズで名乗りを上げた！

「俺、参上！」

『赤鬼の分際で…さっさと退治されるがいい』

「な…なんだとお！？おいピラミッド野郎！今日はこのシーンのた

めに出番とイライラを溜めてきたんだ。ここからは徹底的にクライマックスだからな!!」

ゾーンに挑発され、激昂したモモタロスが大刀を持って暴れ始めた!モモタロスによってマスカレイドが蹴散らされていく。

「あのドーパントの能力がわかったぞ」

しばらく戦闘を続けていると、賢吾がゾーンの解析を完了した。ゾーン・ドーパントは、空間をねじ曲げる能力を持ち、特殊なフィールドを展開し座標指定をすることで、ターゲットを一瞬で遠くに移転させられる。ゾーンはこの能力で、大人数で動くマスカレイドをまるで将棋やチェスのように動かしていた。

「そうか…よし行くぜ!」

そういつてフォーゼがランチャーとレーダーのスイッチをONにし、両方を出現させる。レーダーを構えると、ミサイルランチャーをモモタロスに向けて発射した!

「ちよ、ちよおい!何狙ってん」

次の瞬間、ミサイルがゾーンの能力でモモタロスを襲撃したマスカレイドに命中!マスカレイドは四散した。

「おい、あぶねえな!何考えてんだよ坊主!」

「悪い悪い!こうでもしねえと、あのピラミッドには勝てねえからな!」

『ま、まさか…！？計算してないぞ？』

フォーゼの突拍子もない戦法で焦り始めるゾーン。そしてフォーゼとモモタロスが背中を合わせる。

「オレと一緒に戦おうぜ、モモンガ！」

「俺はモモンガじゃねえ！モモタロスだ！」

マスカレイドを倒し続けるフォーゼとモモタロス。そして残るはゾーンのみとなった。

「モモタロス！オレを持ち上げてくれ！！！」

フォーゼがそう言うのとロケットスイッチをONにする。

「そしてあのピラミッド野郎に向けて投げ飛ばしてくれ！！！」

「お、おう、わかったぜ！！！」

モモタロスはロケットモジュールを装備したフォーゼをゾーンに向けて投げ飛ばした！そしてフォーゼはドリルスイッチをONにし、ドリルモジュールに換装した！ロケット推進によってゾーンに向かって猛進していく！

フォーゼ&モモタロス「俺たちの必殺技、宇宙上等バージョン！！！」

そしてドリルに貫かれたゾーンは撃破され、メモリブレイクされた！ガイアメモリは破壊され、元就はボロボロになった。

「もう一度…日輪を見たかった…」

一方、美琴と黒子は初春と佐天を救出した。佐天が詫びるが、美琴はそんなことも気にしていない。

「すみません御坂さん、白井さん。あたしたちのために…」

「いって事よ。あたしたちはもともと友達なんだから」

しかし黒子が疑問を浮かべる。

「ですが、あのフォーゼと言うのは一体何者なのですか？」

「そうですね…私のほうで調べてみます」

「頼みましたわよ、初春」

日輪財団に勝利した弦太朗は先ほどのゴスロリ・黒猫に呼び出された。

「あなた…仮面ライダーね？」

「仮面ライダー？」

黒猫が言うには、40年前から悪しき魔の手からこの世界を救っ

た伝説の勇者には代々「仮面ライダー」と名付けられる慣わしがあるという。

「仮面ライダー…なんかいい響きだな」

弦太郎は一人満足そうな笑顔を浮かべていた。

ラビットハッチに戻った弦太郎、賢吾、ユウキ。

「ドライバーは君に預ける。それと…」

フォーゼドライバーを弦太郎に渡す賢吾であったが、賢吾はあるものを指差す。

「なんだあれは？」

ラビットハッチの天井には、大きな旗があった。フォーゼの顔が描かれてあり、『つかむぜ、宇宙！！仮面ライダー部』と言うキャッチコピーがされていた。

「見てわかんねえか？仮面ライダー部だ！この学園を悪の組織から守るって部活だ！お前も入れ！」

「私は部員1号!」

この仮面ライダー部は黒猫からの伝説を聞いた弦太郎とユウキが大変気に入り、部活として設立したものだ。

だが賢吾の内心は穏やかなものではなかった…

「如月：やっぱりフォーゼドライバーを返せ!!」

あわてて逃げ始める弦太郎を追っかけまわす賢吾。ユウキが笑顔で見守っていた。

こうして仮面ライダー部の活動が始まったのだ!

紅・白・合・戦（後書き）

キャストの皆さま

『仮面ライダーフォーゼ』

如月弦太郎、歌星賢吾、城島ユウキ

『仮面ライダー電王』

モモタロス

『とあるシリーズ』

御坂美琴、白井黒子、初春飾利、佐天涙子

『銀魂』

坂田銀時、志村新八、神楽

桂小太郎、エリザベス、土方十四郎、沖田総悟

『ハヤテのごとく!』

綾崎ハヤテ、三千院ナギ、桂ヒナギク

『けいおん!』

秋山澪

『Angel Beats!』

仲村ゆり、立華奏

『戦国BASARA』

伊達政宗、真田幸村、毛利元就

『真・三國無双シリーズ』

司馬昭、王元姫

『真・恋姫無双』

関羽愛紗

『魔法少女リリカルなのは』

シヤマル

『俺の妹がこんなに可愛いわけがない』

黒猫

映司：みんな、元気かい？俺は『仮面ライダー000』より、火野映司。

アंक：アंकだ。メダルどころか、人物一人も出てこない俺らが何故この作品の宣伝をせねばならん…

映司：それは、フォーゼとモモタロスがここで共演したからに決まってるでしょ！

アंक：だったらオーズも出すように作者に申告しておけ！

映司！このメダルを使え！！

映司：こ、このメダルは…？なにかわからないけど、変身！

ギャバン！

シャリバン！

シャイダー！

宇宙刑事、ギャリダア

映司：ちよっとこのコンボはないって！

アंक：オーメダルの中の人ネタだ！

後藤：…と言うわけで、ここまでがフォーゼ編だ。だが、この作品はまだ続き、

またフォーゼやほかのキャラが活躍したりバトルしたりするかも知れん。

比奈：読者の皆さま、これからも応援よろしくお願いします。

私、泉比奈と後藤慎太郎さんがお送りいたしました！

設・定・資・料（随時更新）（前書き）

生徒、教職員名簿とテーマ曲一覧です。

キャラや作品が増える、または変わり次第、ここに追加・変更しておきます。

そのキャラが名簿にあるのに本編に登場しない場合、ご了承ください
い^^^;

設・定・資・料（随時更新）

オープニングテーマ：「Switch On!」 仮面ライダー
オーゼOP

2年B組

担任：坂田銀時『銀魂』

学級長：桂ヒナギク 『ハヤテのごとく!』

『仮面ライダーフォーゼ』

如月弦太郎、歌星賢吾、城島ユウキ

『銀魂』

志村新八、神楽、桂小太郎、エリザベス、土方十四郎、沖田総悟

『ハヤテのごとく!』

綾崎ハヤテ、三千院ナギ

『けいおん!』

平沢唯、秋山澪、田井中律、琴吹紬

『Angel Beats!』

仲村ゆり、立華奏

『戦国BASARA』

伊達政宗、真田幸村

『テイルズオブデスティニー』

スタン・エルロン

『テイルズオブシンフォニア』

ロイド・アーヴィング、コレット・ブルーネル

『真・三國無双シリーズ』

司馬昭、王元姫

『真・恋姫無双』

劉備桃香、関羽愛紗、趙雲星

2年A組

『Angel Beats!』

岩沢まさみ

2年C組

『テイルズオブジァビス』

ルーク・フォン・ファブレ、ティア・グランツ

『ONE PIECE』

モンキー・D・ルフィ、ロロノア・ゾロ、ナミ、ウソップ、サン

ジ、ニコ・ロビン

『FATE』

セイバー、衛宮士郎

1年A組

担当：織斑千冬『インフィニット・ストラトス』

『けいおん!』

中野梓

『Angel Beats!』

ユイ

『とあるシリーズ』

上条当麻

『テイルズオブシンフォニア』

ジーニアス・セイジ

『魔法少女リリカルなのは』

スバル・ナカジマ、ティアナ・ランスタール

『インフィニット・ストラトス』

織斑一夏、篠ノ之箒、セシリア・オルコット、鳳鈴音、

シャルロット・デュノア、ラウラ・ボーデヴィツヒ

『マクロスF』

早乙女アルト、ランカ・リー、シェリル・ノーム、ミハエル・ブ

ラン

『フルメタル・パニック！ふもっふ』
相良宗介、千鳥かなめ

1年B組

『灼眼のシャナ』

シャナ、坂井悠二

『真・恋姫無双』

呂布恋

3年B組

『魔法少女リリカルなのは』

高町なのは、フェイト・テスタロッサ

『テイルズオブヴェスペリア』

ユーリ・ローウェル、フレン・シーフォ、エステル

3年C組

『仮面ライダー電王』

モモタロス

『テイルズオブヴェスペリア』

ジュデイス

『コードギアス 反逆のルルーシュ』

ルルーシュ・ランペルージ

『真・三国無双シリーズ』

司馬師

中等部

『とあるシリーズ』

御坂美琴、白井黒子、初春飾利、佐天涙子

『俺の妹がこんなに可愛いわけがない』

高坂桐乃、黒猫

『ティルズオブデスティニー』
リリス・エルロン

教師

『銀魂』

坂田銀時 国語担当

『ティルズオブシンフォニア』

リフィル・セイジ 社会担当

『ティルズオブジァビス』

ジェイド・カーティス 理科担当

『インフィニット・ストラトス』

織斑千冬 数学担当

『けいおん!』

山中さわ子 音楽担当、軽音楽部顧問

『戦国BASARA』

片倉小十郎 剣道部顧問

武田信玄 体育担当、ラグビー部顧問

『魔法少女リリカルなのは』

シャマル 養護教諭

生徒会

生徒会長：不明

学園のトップ

校長：シャア・アズナブル 『機動戦士ガンダム 逆襲のシャア』

理事長：ハマーン・カーン 『機動戦士Zガンダム』

教頭：不明

その他（外部出演、ゾディアーツ、ドーパント含む）

『仮面ライダーW』

左翔太郎、フィリップ、鳴海亜樹子、照井竜

『仮面ライダーOOO』

火野映司、アंक、泉比奈、後藤慎太郎

『銀魂』

長谷川泰三、近藤勲

『とあるシリーズ』

インデックス

『コードギアス 反逆のルルーシュ』

C.C.

『Angel Beats!』

野田

『戦国BASARA』

前田慶次

毛利元就

満・腹・絶・倒（前書き）

家康：この学園の連中と友達になること…

弦太郎はすごい目標を持っているのだな！

幸村：おう！弦太郎殿はまこと立派な漢の鏡でござる！

三成：フン、下らん！家康ほどではないが、無性に斬滅したくなる！

元就：我もあの男の性で散々に扱われた…万死に等しい！

政宗：アンタも人のこと言えねえな、石田三成！

慶次：その髪型があいつに似てるぜ！！

三成…ヤツと一緒にするな！！

元親：はっはっは！いつか俺らも、この作品に呼ばれる日が来るといいもんだ！

満・腹・絶・倒

飲食の欲、好色の欲、睡眠の欲、名誉の欲、金品の欲、強さの欲、
好奇の欲：

人間には、捨てられないものがある。それは「欲」である。

この学園の昼休みはどのような食事を摂ってもよい。

まずは、弁当だ。

親や恋人が真心込めて作り上げた弁当を平らげた者に、初めて親
屋恋人からの愛情を知ることができるであろう。

だが、そんなものよりもっと破壊力があるのは「片思い」への
弁当だ。もじもじしながら片思いしてる人が「これ、食べてくださ
い」などと言ってされている人に弁当を手渡し、それで食べてもら
ったらその片思いしてる人はやはり幸せだ。

次に、買い食いだ。

売店で少ない出費と姑息な頭脳を駆使し、パンとか弁当とかおに
ぎりとかカップ麺とかお菓子とかジュースとかを買い、それで腹を
満たす。

また当たり前のようかもしれないが、学園管轄の売店は24時間
営業ではないので、売れ残りで割引されているものが売っていたら
隙あらばその手に掴み取り、レジへ運んでいくのだ。

このことから、生徒たちの金銭状況を物語っていることが伺える。

そして、学食だ。

この学園には当たり前のように学食がある。

学生のためにセルフサービスによって人件費が削減され、食材を安く仕入れることで比較的ボリュームのある飲食物を提供できる。つまり「味と安さと早さと満腹感のバランスのとれた食事」を取ることができなのだ。

また、ここでは中庭のあるカフェテラスもあり（転校編でいったん破壊されたが、何故かこの時点で元に戻っている）、いずれも安い割にはメニューは豊富で、その数は居酒屋にも匹敵する。

ここ、学食ではある中等部の生徒が考案したと言う『マーボーカレー』なるものが人気だ。その値段は600円。このマーボーカレーを、3人の生徒が食していた。ちなみにいずれも3・B組であるマーボーカレーを口に含ませた兄貴肌の黒髪の青年・ユーリがこう言う。

「ソナア、ヒイタカ、ウウエン、エフフェル。アオウオウオタロフガウイネンノフェンコーヘートホガグニウアイアツタツテヨ（んなあ、聞いたか、フレン、エステル。あのモモタロスが2年の転校生と互角にやりあったってよ）」

「ユーリ、食べながらしゃべるのは善くないよ……」

真面目な金髪の青年でユーリの幼馴染であるフレンが彼に注意する。

「でも、その転校生、この学校の人たちと全員友達になるって噂があるのですが、何か壮大なロマンですよね！わたし、尊敬してしまいます」

穏やかで天然なピンク髪の女子生徒、エステルが目を輝かせながらその転校生（しかも後輩）に思いを馳せる。彼女はいわゆる箱入

り娘で、その影響が思い込みの激しいロマンティストになってしまっている。

「あら、こんなところにいたのね」

3人のもとに尖った耳に後頭部に奇妙なものをつけた青髪の女子生徒、ジュデイスがやってきた。持ってきたのは、やはりマーボーカレーである。

「ジュデイ。お前確か、モモタロスと同じクラスだよな。あいつに關して何か変化はなかったのか？」

ユーリに呼びかけられるジュデイス。彼女は3人とは別のクラスであった。

「そうね…以前、2-Bが中等部の生徒を助けるために日輪財団に殴りこみに行ったのを覚えてる？あの時、モモタロスも殴りこみに行ったそうよ。うふふ、私も行けばよかったかしら…」

ジュデイスが見せる本性に若干引く3人。ジュデイスはスタイル抜群の美人で普段こそ落ち着いているが、マイペースで好戦的であり、彼女の美貌に惹かれてナンパした男たちを何度も返り討ちにしているという噂が後を立たないらしい。

「2-Bって、確か噂の転校生のいるところですか？」

ジュデイスの報告にエステルが口を出す。しかも頭の中はやはりロマン溢れている。まあユーリ達はそんなに悪い人間ではないといっているが。

「そういえば、転校生見たことあるんだ。ほら、2・Bの生徒と一緒に」

フレンが指差すと…

銀髪天然パーマの死んだ目の教師と、眼鏡をかけたなんか地味そうな生徒、オレンジっぽい髪のチャイナ娘、そしてリーゼントという昭和の不良のような青年が席に座っていた。

「あゝ！いつまで俺らはこんなもん食い続けなきゃいけないんだ？」

銀時は教師と言う立場でありながら教え子の新八、神楽、弦太朗の4人で食事を取っていた。銀時はたぬきうどん（200円）、新八はカレー（200円）、神楽は玉子丼（200円）を食べていた。銀時、新八、神楽は一応住居は持っていて同居しているのだが、その経済状況は火の車である。そのため、うどん カレー 玉子丼 うどん …とローテーションを組んで食べているのだ。しかもこの3つのメニューはこの学食で最も低い値段で提供されている。

その様子を眺めていた弦太朗は銀時を「銀さん」と呼び、こういつた。

「銀さん、いい加減飽きねえか？毎回うどんとカレーと玉子丼じゃ」「そう言う弦ちゃんはいいアル。ちゃんと私らのモンよりマシなもの食ってるネ」

神楽に言われた弦太朗が口に使っていたのは、カツ丼（350円）

であった。

「カフェテラスにでも行けばいいじゃん。あそこは100円でいい食いモンそろってるぜ。ハンバーガーとかホットドッグとかよ」

「嫌だ！ハンバーガー2個で200円も取られたくねえよ！どこのマクナルドだよ！」

銀時がかたくなに拒絶する。カレーを食べていた新八が呆れてため息を吐く。

「銀さん、もうあきらめましょう。ハンバーガー2個でもおなかを満たされないでしょうし」

その時、新八の言葉を遮るかのように大きな声が響いた。

「いやいやいや！今カフェテラスはすっげえとこやってるよ！」

弦太朗たちの前に現れたのは、派手なちょんまげに派手な髪飾りをしており、肩に猿を乗せたいかにも傾奇者という感じの青年だ。

「俺は人呼んで学園の風来坊・前田慶次まえた けいじつてんだ！KGと書いてKGいじって呼んでくれ！んでこっちの猿は夢吉いじな」

傾奇者は両手をクロスさせ、左右の指でそれぞれ「K」と「G」の文字を作って自己紹介した。

「…なんか胡散臭そうですね」

「そうアル、こついうのは関わらないほうが身のためネ」

「うん、あれだよ。『かまってちゃん』って言うんだっけ？」

「待て待て！俺をそんな風に見ないでくれ！」

無視しようとする万屋メンバーを制止する。慶次はカフェテラスに関する情報を仕入れていた。

「今、ここの学園のカフェじゃ、大食い大会が開かれているんだぜ
！」

「へえ！面白そうだな！」

「やめとけ、こついう奴は関わるとろくな事がねえぞ」

好奇心旺盛な弦太朗を諫め、無視する銀時以下2人。だが次の慶次の言葉が、万屋メンバーの心を突き動かした…

「この大会で優勝すれば、賞金5万が入るよ！！」

「うおおおおおおおおお！！絶対優勝して金もらつぞおおお
おおお！！」

銀時「後は頼んだ！弦太郎！」

新八「後はお願いね！弦太郎君！」

神楽「後は任せるネ！弦ちゃん！」

金に対する執念に魂を燃やした3人は、うどんとカレーと玉子丼を残して弦太郎に差し出し、猛ダツシユでカフェテラスへ急行した！物欲に目が眩んだ3人を見送った弦太郎はため息を吐く。

「ろくなことになんねえって言ったのは銀さんだったのに…大丈夫なのかね」

一方、慶次からの情報を聞いたユーリ達は…

「大食いねえ…オレはごめんだな」

「僕はもうマーボーカレーで限界だよ…」

「私も今ダイエット中だから…」

ユーリ、フレン、ジュデイスが大食い大会に興味がない中…

「やってみたいです！」

エステルが立ち上がり、カフェテラスに足を運ぼうとした！

「待てよエステル！大丈夫なのかよ？」

「ユーリが必死に止めようとしたが…」

「わたし、大食い大会出てみたかったです。テレビチャピオンで見えましたから」

エステルの天然発言に3人はコケた。

『胃袋のでけえヤツ、出て来いやー！月一回のカフェテラス名物、大食い大会が今月もやってまいりました！ルールは簡単！出された食べ物をガツガツ食って食って食いまくるだけ！！勝者には賞金5万円が授与されます！』

ハイテンションにマイクを握り、意気揚々に叫ぶ高田彦にそっくりな司会者の号令のもと、カフェテラスで大食い大会が開催された。観客の歓声がかフェでこだまする。

『まずはエントリーナンバー1！2-Cのモンキー・D・ルフィ！』

まず最初に現れたのは、麦わら帽子を被った無邪気な少年だった。

「おーっし！大食い王に、俺はなる！」

同じクラスである、タラコ唇で鼻の長いウソップがルフィに激励する。

「ルフィ！負けんじゃねえぞお！」

「絶対勝つからな！期待しとけよ！」

『エントリーナンバー2！2-Cのセイバー！』

2番目の出場者は、青い騎士装束を纏った金髪の少女であった。

「この戦いに勝利すれば、賞金はもらえるのですね？」

『もちろん！10万手に入りますよ！』

(…これでぬいぐるみがいっぱい買える…！)

セイバーは、凜々しい見かけによらず趣味がアレだった。彼女の友人である衛宮士郎えみや しろうが声をかけると、彼女が笑顔で答える。

「頑張れセイバー！俺が応援してるぞー！」

「任せてください、シロウ」

『エントリーナンバー3！3-Cの司馬師しげし！』

端正にして高貴な顔立ちをし、仮面をつけた青年が天に指を指した。

「頂点に立つのはこの私、司馬子元しげもとだ！」

「兄上…何やってんです…」

ギャラリィの中には弟の司馬昭がいた。司馬師が声高々に名乗る。

「昭か。この戦いで頂点を目指す兄の姿を見ておけ」

『エントリーナンバー4！1 - B、呂布恋りふれん！』

そう呼ばれた、二本の大きなアホ毛が立っているぼんやりとした女の子がホットドッグを貪り食っていた。

『ちょっと待ったー！食べるのはまだ早すぎるよー！？』

「……………まだなの？」

『いいから早く試合に戻りなさい！』

『エントリーナンバー5！何故か飛び入り参加のインデックス！』

「えへへーよろしくねー」

白い修道服を着た小柄なシスターが笑顔を浮かべていた。

「イ、インデックス?!あれほどオレの部屋にいろって言ったのに
」!

当麻もギャラリィにいた。彼はインデックスの保護者らしい。

「だってとうまが学校へ連れてつてくれないんだもん！だからこの大会でとうまを見返してやるもん！」

「不幸だあー！」

インデックスがすね始める。あきらめてください、当麻君。

『エントリーナンバー6！3 - Bのエステリーゼ・シデス・ヒュラッセイーン！！』

エステルがやってきた。

「この大会に出てみたかったです 応援、よろしくお願いします
！」

彼女について心配するフレンを、ユーリが諫める。

「本当に大丈夫かな」

「エステルはああ見えて一生懸命だからな。言い出したら聞かねえよ」

『エントリーナンバー7！1 - Aのスバル・ナカジマ！！』

スバルが鉢巻を締め、臨戦態勢に入る。ギャラリーには彼女の親友であるティアナもいた。

「あんだ弁当食べたばかりでしょう？太るわよ」

「食事があたしの趣味だからね…それに、こういうみんなで和気あいあいに食べるのが好きなんだ！」

「金の亡者どもと競い合う大会のどこが和気あいあいのよ…」

スバルの発言に、ティアナが呆れて突っ込んだ。

『面倒なので一気に行くぜえ、エントリーナンバー8、9、10！
2-Bの志村新八、神楽、そして2-Bの担任、坂田銀時イイイ！
』！

「…俺（私）たちはオマケつきかあああああ…！！」「」

3人のツツコミがカフェに轟いた。

『これより始めます。食べるものは肉まん！制限時間は15分！それでは用意…始めッ！！』

参加者10人が一斉に蒸籠の中の肉まんを手に取り、喰らいはじめた！！

スバルが最初の肉まんを蒸籠から取り出すと、それを嵐のごとく

口に入れ始める！

「ガブガブガブガブ…！おかわり！」

『おお、いい食いつぶりですねスバルさん！』

「優勝したら、ガブガブ…新型のカメラをかうんです！モグモグ…」

「やっぱり金が目的じゃない…」

スバルと司会者のやり取りに、やはりティアナが突っ込んだ…

司馬師が肉まんを食べていると、突然手が止まった。すると眉をひそめてこう言った。

「…安上がりだろうな、肉まんの具の処理が稚拙だ。包む前に具材を炒めたな？生のまま包んでこそ割ったときに肉汁が出ておいしいものだ。それになんでも肉にすればいいというのも間違いだ。キャベツや白菜を入れてシャキシャキ感を…」

『ちよつと、大食い大会ですよ！？』

「何を言っている！私は肉まんを食うためにこの大会に出てやったのだ！この頃カフェテリアに肉まんがメニューにないからイライラが溜まっていたのだ。肉まんが食えるというから今日この日のために腹を空かせてやったというのに、周りの凡愚どもは肉まんに対する情熱と愛情と言うものが…」

「これ、すっごくおいしいよ！とうまー、たべるー？」

インデックスも山のように詰まれた肉まんを平らげてしまう。

（ああ…なんか癒される…ぬいぐるみみたい…）

彼女たちのその姿を見たセイバーは何故か恍惚の表情になっていた。

エステルのほうも肉まんの美味さに、恍惚の表情を浮かべていた。

「これが中国の肉まんです？初めて食べますが、なんだかとってもおいしいです！」

「うむ、やはりお前もわかっているな。この柔肌のごとき白き皮…そして肉汁香る褐色の誘惑。肉まんこそファーストフードの中でも最大の芸術だ…」

エステルの感想に司馬師が口を割り込んできた。どうやらこの男は肉まんに対して一種の信仰に近いものを持っているようだ。その時…

「肉まんを憎まん！…いまいちですよね」

声が聞こえたが、あえて聞かなかったことにした。

一方万屋サイドでは…

銀時「うおおおおおおおおおおお！！」

新八「でやあああああああああああ！！」

神楽「ぬうるあああああああああ！！」

賞金5万のために執念を燃やし、肉まんを次々と喰らい続けた！
それは怒涛のごとき続いたが…

「オウエー、もう限界だ…」

「ワタシも腹いっぱいアル…」

新八と神楽のお腹に限界が溜まっていた…。まあ地味な新八はともかく、大食漢の神楽も撃沈したのだが…

『おおーっ！っ！っ！すごい勢いで食べている選手がいます！！』

スバル「え！？本当！？」

司馬師「ほう…」

恋「…？」

エステル「誰です？」

セイバー「なんと…強敵か…」

ルフィ「面白そうだな！」

インデックス「すごいすごい〜！」

「ガロオアアアアアアアア！！！！」

『エントリーナンバー10！2 - Bの坂田銀時先生ツ！！』

なんと銀時が肉まんをまるでハイエナのように貪り食っていた！
！銀時の金に対する執念の熱い炎は、いまだに燃え続けていた…！
あまりの闘争心に、ほかの競技者は…

スバル「すごい…敵わないや…」

司馬師「なんとも恐ろしい執念だな」

恋「…恋の負け」

エステル「わたしもさすがにここまででは…」

セイバー「勝ち目がないな…棄権するか」

ルフィ「あっちゃー、おれもう無理だな…」

インデックス「がんばれ〜！」

全員が棄権を決め、銀時を賞賛した。

『あーっと！続々と選手がリタイアしたあー！なんと残ったのは銀時先生のみ！』

勝者は、坂田銀時であった。司会者も彼を賞賛し、ギャラリーからも拍手が響いた。

『感動です！その大食いに打ち込むその姿はまるで…まるで…』

『まるで…玉…？』

……………ギャラリーの目に映ったのは、賞金に対する執念のあまり、今もなお肉まんを喰らい続ける、太りまくった銀時であった。銀時が気づいたときは、肉まんの食いすぎで肥大しすぎた腹の贅肉のせいで、足元すらも見えない状態であった。

満・腹・絶・倒（後書き）

『仮面ライダーフォーゼ』

如月弦太郎

『銀魂』

坂田銀時、志村新八、神楽

『テイルズオブヴェスペリア』

ユーリ・ローウェル、フレン・シーフォ、エステル、ジューデイス

『ONE PIECE』

モンキー・D・ルフィ、ウソップ

『Fate』

セイバー、衛宮士郎

『とあるシリーズ』

インデックス、上条当麻

『真・恋姫無双』

呂布恋

『魔法少女リリカルなのは』

スバル・ナカジマ、ティアナ・ランスタール

『真・三国無双シリーズ』

司馬師、司馬昭

『戦国BASARA』

前田慶次

(銀時によって破壊されたカフェテラスを一人で掃除するマダオ)

マダオ：俺ってこの前こんなことしてたよっな…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5038x/>

こちらコラボレーション私立クロスオーバー学園

2011年10月20日02時09分発行